

平成28年（西暦2016年）2月

瞑想録（その11）

滝沢 無縛（たきざわ むばく）

本論は私の日々の瞑想の結果をまとめたものです。私のライフワークは、狭い意味では連続体の神秘をアニミズム的多神教で瞑想する、「連続体と蓋然論理」です。最近ではより広範に、「人間とは何か、自分とは、そして宇宙とは」と言う観点を、科学ではなくまた学問でもなく、専ら瞑想で追い求めています。そのためのキーワードは「素朴な疑問」と「意外な気付き」です。つまり真の知恵について瞑想しています。瞑想であるという特性上、根拠をこれ以上提示できない言明やトンデモと言われそうな見解も含まれていますが、世の中科学で証明された決まりきったことだけではつまらないでしょう。私自身、「つまらない事実よりも出来の良い冗談の方が面白い」と言う立場で居ます。ですから、あくまでも新提案部分を肯定的に拾ってあげるつもりで見てください。その上で本文の言明を信じるか信じないか、それは読者一人一人に委ねられています。私は死後の世界に恐れはないですし墓も要らないのですが、あたかも墓誌銘には、“He loved freedom. He meditated for interest. And he lived a pleasant life.”と書いてほしいと願っています。なお、この論集の基礎となる先立つ瞑想録については、下記のサイトを参照してください。

<http://www.geocities.co.jp/bimromav13/>

2015. 12. 31

1、インテリ芸術家の1つのパターン

一流大卒のインテリでありかつ芸術家としても周知な人々がいる。多芸に秀でて多彩なのであるが、なぜか著名にまで至らない、そこにはある傾向があるようにも見える。そんな人たちとして本日は、長谷川權、小椋佳、太田和彦の3名を例に検討を試みる。

長谷川權は東大法学部卒で俳人である。小椋佳も東大卒で銀行マンであり歌手であり作曲家だ。太田和彦は東京教育大（現筑波大）卒で大企業の宣伝マンを経て今は居酒屋評論家、より広くは地方大衆文化評論家である。いずれも日本国民に周知の人たちだ。

長谷川權は俳人で句会を主宰していたこともあった。だがその作品や評論は俳句に

留まらず、短歌や詩に至るまで広い。一般に俳句と短歌や詩は類似であってすぐに習得できると思われがちだが、逆に似ているからこそ気持ちの切り替えがスムーズにできず、慣れるのに最低3年はかかると言われている。それを長谷川は難くこなした。器用で頭が良いのだ。この人は以前にNHKの俳句番組の選者を務めていたが、その時も例えば蚕の糸の繭取について専門用語をふんだんに用いて10分以上も滔々と知識を披露していた。必要以上の物知りでもあるのだ。典型的な東大気質である。

だがその長谷川は一般には、「サラダ記念日」の田原万智程には知られていない。彼の作品が一句でも後世に残るかと言われれば、微妙なところだ。加えて彼は俳句のある大御所に、「作品のどこかに言葉のおごりが見える」と手厳しく批判されている。要するに知性が邪魔をしているのだ。同じ東大卒でも、徴兵されて南洋で生死をさまよい職場では組合活動をして干された、文化功労者受章者の金子兜太さんとはかなり違っている。

小椋佳、これは芸名であるが、東大卒後大手都市銀行で部長まで務めた後に早期退職して、芸能活動に専念している。そしてそこにも理屈があって、「25歳までは親に頼って、50歳までは会社に頼って生きてきた、75歳までは芸術を自力で生きたい」のだそうだ。彼が売れたのは若い時に趣味で作った「シクラメンのかほり」であり、これはバカ売れしたがほかの曲は一切「鳴かず飛ばず」である。

かぐや姫の南こうせつなども売れない曲も作ってはいるが、一生作ってたった1曲と言うのは珍しい。それに「シクラメンのかほり」もよく聞くと随分と理屈っぽい、それでも彼の作品では理屈がないほうである。そして彼も、ともすればラーメン屋のオヤジだったかもしれない北島三郎や、高卒後に梅干し屋の店員から始めた坂本冬美に比べて、知名度は今一だ。

そして最後に太田和彦、実はこの人こそが元祖のTV居酒屋ナビゲーターなのだが、今は酒場放浪記と言えば誰に聞いても吉田類であって、太田の名前は出てこない。番組自体は細々と続いていて、ユーチューブにもアップされているが、理屈屋の私が見ても全くつまらない。もう吉田の圧勝である。もちろん太田の方が細かいところまでよく観察しているし情報量やうんちくも多いのだが、その体はほとんど大学の先生の講義だ。

他方の吉田、若いころは漫画家志望で高校卒業後にフランスを放浪していたらしいのだが、安くないだろうに資金の出所は絶対黙秘だ。そういう如何にも怪しげな人物だ

が、独学で学んだのか漫画や挿絵のほかに俳句もやり句会まで持っていて、しかも長谷川の句よりもよっぽど面白い。こういう多芸で庶民的な人柄で居酒屋をマイペースで巡り、たまたま居合わせた人々と歓談する姿は、視聴者を和ませる魔力を持っていて貫禄すら感じられる。

こうインテリ芸術家3人を見てきて、もちろん彼らがインテリの全員をカバーしているとは言わないが、デフォルメ似顔絵のように蓋然的に、その特徴を極端に出していると感じる。つまりこれらの人々は知が前のめりすぎていて、一般の人々の感性とかい離しているのだ。「頭が良くて損したね」と慰めの声の一つもかけたくなくなる。そしてインテリが芸術や芸能をやると陥りやすい、これが一つの共通した大きな落とし穴なのだ。「インテリはしばしばマニアックに陥って自滅する」と言う法則が見える。

一般に東大生は芸術家でなくても、なんでも器用にこなすが小さくまとまっていて、「使い勝手の良い使用人」の印象が強い。歴代の日銀総裁や外務次官のイメージだ。そこに行くと早慶レベル、この人たちは東大程でないものの頭は良いのだが、今一器用でなくて分野も広くなく、どちらかと言うと一所懸命と言う感じだ。その割にプライドが先行していてしばしば鼻につく。特に先生方にこの傾向が強い。但し私学のおかげか人物的には個性がある。有名人から代表を挙げるならば、慶応は池上彰や石坂浩二、早稲田はタモリや久米宏と言った感じか。特に早稲田は中退の方が早稲田らしくて、その代表が最近物故した野坂昭如だ。

これよりさらに庶民的で有名と言うことになると、男性ならみのもん太とか古舘一郎、女性なら大江麻理子や有働由美子とかだが、彼女らは知性よりも庶民性と、その割の品の良さで売っている。男性の方は個性のきつさで覚えてもらっているという感じだ。そういえば東大卒の天明麻衣子も、教科書的な問題はパーフェクトだが一般常識になるとからきしダメだ。

まあ結局人は適材適所で、どこでどう花開くか分からない。頭が良いばかりが能ではないし、結局は自分が楽しんでやっていれば、それが一番ということだろう。

2、筆跡鑑定

本日は究極のアナログとして、筆跡鑑定を取り上げてみます。アナログでしか本質に迫れない、したがって現状は勘と経験で定性表現しかない鑑定技術としては他に、手相、人相、美術品の真贋鑑定などがありますが、筆跡鑑定もその1つです。そして手

相や人相と同じく、性格や将来を占うという役割とともに、遺書の真贋や裁判の証拠資料としての認証的な役割の面も持ちます。

手相や人相や血液型占いを迷信と言う人はいるでしょうが、真贋鑑定や筆跡鑑定を「科学でなく技能だ」と言う人はいても、迷信と言う人はいないでしょう。専らの認証技術としては指紋や虹彩などがあり、こちらは区別が役割のすべてでデジタル技術も実用の域を迎えています。筆跡鑑定にデジタル技術はまだ遠い道のりです。

さて筆跡鑑定と言うと、人の書いた字のその形状や勢いと言った全体観から性格や健康状態を読んだり、あるいは同一人物のものか否かを判別したりするわけですが、その判定は直ちにアナログ全体観のみかと言うと、そうではありません。そこは日本語の特徴上、①旧漢字を使っているか、②ひらがなよりカタカナか、③万葉仮名や今は使われない字を用いているか、④「かほり」「しませう」と言った昔言葉を用いているか、⑤更には表現内容が幼稚でないかと言った、アナログに入る前の形式論でかなりのことが言えるという点にまず注意すべきです。

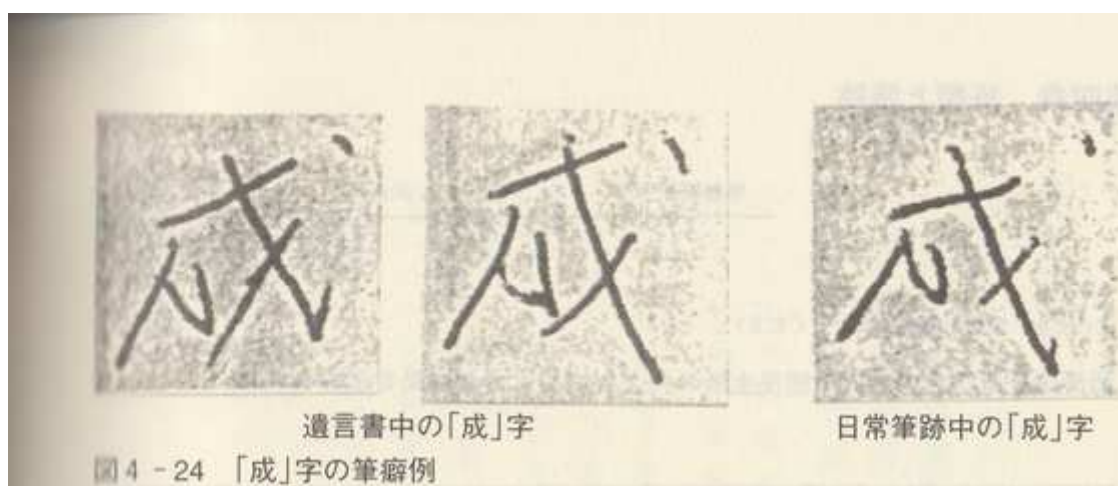
これら形式論を過ぎて初めて全体観に入ります。そして筆跡と言うアナログですが、これが複雑なのは紙に字が書かれるまでに、①言葉の取捨、②文字選び、③筆（筆記用具）選び、④手先の運動（利き手を含む）、⑤既に書いた部分の認識、⑥情報伝達を超えた字列全体の美意識と統一感といった多様な要因を含むためです。更に、①その日の体調や急ぎ具合など個人の都合、②意識無意識の手本の選択、③時間の経過による筆跡の変化、④同じ文章の中の同じ字でも筆跡としては揺らぎがある、と言った多様な状況の中で、本来固有のその人らしさと言う特徴を抽象し抽出すると言う難しさがあります。一種の特徴抽出ですね。

さて、これらの複雑に絡まる要因の多さに納得した上で、本題である「筆跡の全体観」に進みましょう。これもあくまでも全体観なので、個々の要素を言い始めると全体が見えなくなってしまうのですが、更に鑑定結果を他者に伝えるには言葉を有限個から選ぶというジレンマもあるわけです。ですから結局は美術品の鑑定と同じで、最終的にはどれほどの実績と慧眼の鑑定士が鑑定したかに依ってしまいます。それでは「分かる人にしか分からない」と言う未展開に陥ってしまうので、強いていくつかの要因を挙げますと、①字の大きさ、②字のそろい方、③漢字と仮名の大小関係、④字の間隔の程度、⑤右上がり・左上がり・縦長・横長、⑥漢字の書き順の正誤、⑦丸い字か角の張った字か、⑧書道の心得がある字か無い字か、⑨字の力強さ、⑩字の並びが真直ぐか曲がっているか、⑪跳ねるところをはねる・閉じるところを閉じると言った几帳面さはどうか、⑫にじんんでいるか・紙の裏側から見てどうか、等々になります。主要なもの

だけでも10以上にも及ぶ項目があり、それぞれの項目についてどう合っているか・どう外れているかで、それこそ千変万化します。その中で、「これはその人に内在した固有の特徴だ」と言う固定要素を、慧眼で見出す作業になります。

結局どの要因も極めて多面的で、およそデジタル計算機ではつかみにくい要因ばかりです。指紋や虹彩とはその程度が大きく違います。例えば主軸（縦軸や横軸）が傾いているときに、その傾きの角度とその頻度を統計的に出してみるとか、跳ねについてその角度と分布を集計してみると言ったことは、計算機定量鑑定のとっつきとして考えられますが、見た目ほどに明白に出ないうえに、それが筆跡のどれだけ本質をえぐっているかも疑問です。ただ、最終的に専門家が鑑定するものの、その鑑定のための画像拡大とか、色調統計とか、同じ字や部首を共通にする字にタグをつけると言った、補助的役割には使っているようです。

また著作権侵害の認定と似た面もあって、①字の間違った使い方、②筆順の誤りによる筆の異常な流れや字のバランスの悪さ、③わざと筆跡を隠そうとしたときについて出してしまう癖等は、結構本人の内在的な癖に近いものとして珍重されます。それに文字数は単純に多いほど良いのであって、一字で鑑定すると称している人はむしろ偽者です。また文字列は一般に、その人なりに一貫した統一性、文学や芸術で言うところのモチーフがあるのが普通で、そのモチーフを見出すことが筆跡鑑定の核心なのですが、中には下手な小説のようにモチーフがおおよそ見えない筆跡もあり、それはそれでヒントになります。



上の例は文末に記した本から採りました。これらの字は同じ漢字ですが、同一人物の筆跡か否か、理由は何か、自分でやってみると結構思いつくことがあります。そしてこれが筆跡鑑定の醍醐味でしょう。もちろん「アナログ語」で表現できれば、それに越し

たことはないのですが。

（注：魚住和晃「筆跡鑑定」も参考にしました）

3、動的幾何

これまでに「アナログ集合の見え方」等の記事で、アナログ集合が基本的に非次元空間なので、3次元空間に慣れてしまっている我々はどう見たら良いかを説明してきた。我々の存在する物理空間は従来の教育通りの4次元線形時空、もしくはこれを継ぎ合わせた多様体である。つまり極めて杓子定規であってつまらないが、心理的な内的空間であるアナログ空間は融通無碍で、極めて多面かつ多様である。これまでの優れた宗教者や芸術家は、これを何とか表現しようと悪戦苦闘してきた。

さて、冒頭に言及した「見え方」の記事で念頭に置いたのは、色とか感情とかの具象の内的心的表現で、基本的には表現として単語を用いて表されるものを念頭に置いてきた。だが現実の表現や思念はもっと複雑である。簡単な例で「空は青い」、これはおよそ3歳以上ならだれでも実感を持って理解できるありふれた観想であるが、ここでどうやって全く異なる概念である「空」と「青い」が、内的空間に於いては結合しうるのであろうか。またその複合概念である「空は青い」は、その構成要素である「空」や「青い」と、どういう位置関係にあるのだろうか。

まず「空」と「青い」の結合について言えば、これらは互いにタグを共有していて、そのタグによる結合結果について経験等に照らして対応する情緒的実体があるために、別途新たなアナログ集合として了解されるのであるが、これを論理でなく幾何としてみたときには、「空は青い」は「空」の詳細化でありまた「青い」の詳細化であるから、それらの部分集合と言うことになる。

ところがこういう見方をしていくと、表現が長いほど小さな部分集合であるということになってしまう上に、全く異なる「空」と「青い」が共通の部分集合を持つことになり、したがって距離が近い（類似だ）ということにもなってしまって、およそ現実的でない。これをあまたの情緒についてやっていくと、アナログ空間とはとてつもなくゆがんだものになってしまうし、小説などコメ粒ほど小さいほとんど点の集合だということになってしまう。

5年ほど前に「擬距離空間のコズミックダンス」という記事をアップした時に、ガイドウオークでの経験として、奥多摩のガイドさんが「実は生まれは深川だ」と言ったときに、私の頭の中で奥多摩と深川と言う、関連もなければ近くもない2つの場所が、意外性

とともに急接近した経験を書いた。これ自体は自分にも興味深い経験だったのだが、こう言う「接近関係」を話があるためにため込んでいては、頭の中はおよそ不整理にくつつき歪んでしまう。これをどう見たらよいのだろうか。

これに対する答えは「動的幾何」だ。以前にも指摘したように、またヨガや禅でもそうだが、宇宙の本質であり根源であるのは振動だ。「オーム」と言う宇宙の音だ。陰陽道も陰と陽の振動だ。人は呼吸で生き、会社との往復で日々を過ごしている。これらも振動だ。量子力学でも、最低順位には零点振動がある。ここで振動とは正弦波のような出来すぎたデジタル振動ではなく、もっとイレギュラーな、広い意味での往復運動のことだ。

この観点からすると先ほどの奥多摩と深川の急接近も、その驚嘆した時には空間が大きく歪み振動して接近したということだ。そしてやがて離れて元の位置に戻る。このように、一見複雑に見える現実に対する心的作用の形態も、基本はさほど複雑でなく、時に感動に対応したダイナミックな振動によりその心の躍動が表現されると説明できるわけだ。

「空は青い」、こう聞くと誰もが「ああ、あの感じね」と納得する、もちろんその納得の感じには個人差があるが。つまりこれは1概念なので、独立した一定の幅を持つアナログ集合で、一応「空」や「青い」とは独立だ。さらに「空が青いので私は戸外に出た」と長く続くとこれも、「空が青い」と「戸外に出た」を直近の構成要素とした複合物で、かつこれで意味が取れるから新たな1つのアナログ集合になる。

このようにして小説1つ、例えば「源氏物語」も人は「ああ、あれね」とか「宇津保物語の影響があるね」などと1概念でとらえている、つまり1つのアナログ集合だ。さらに「ロシア文学を読んでいるとロシア人の大半は精神異常かアル中に見えてくる」と言う表現からは、個々のロシア文学がいちいち1つのアナログ集合になっていて、さらにそれらを総括した「ロシア文学」と言うアナログ集合があることが見て取れる。

なお、従来の数学では集合に「要素と集合」あるいは「上位概念と下位概念」と言う階層をつける。これは「要素は点 vs.集合は連続体」と言う、点から無限への非連続ジャンプの矛盾を隠すトリックとしては有能だし、数学としても自分を多彩にできる便利な道具だし、さらにシステム思考の欧米人には親しみやすい。だがアナログ集合の観点からはどの集合も等しく連続体だから、階層と言うよりも平等な包含関係と捉えたほうが良いだろう。つまり弾性体はゴムやばねの、上位概念ではなく包括概念だ。

最後に、「空は青い」これはすんなり来るが、「空に青い」「空と青い」これらは意味が取れない。対応する体験が概念出来ないからだ。限りなく文法間違いに近い。では「空が紫だ」、これはどうだろう。文法間違いはないが対応する事実や経験が存在しないので、意味は分かるけれどもこの叙述は偽となる。「空は青いので戸外に出た」、これはすんなり来るが、「空が青いので鬱になった」、これはちょっと首をかしげてしまう。もし小説の出だしだったら「何かの伏線だろうか」と引っかかるところだ。この「素直にいくか引っかかるか」この分かれ目には、対応する幾何構造があると想定している。

4、マニ教

マニ教については1年ほど前にすでに、やはり「マニ教」と題する1記事をアップしていて、そこではマニ教がキリスト教の謀略によってローマ皇帝の勅命による弾圧の対象となって衰微したこと、そしてそれさえなければ今頃は、キリスト教及びイスラム教に代わって世界宗教となっていただろうと言う可能性を指摘した。その後の記事でも何回か、例えば「宗教の勝敗」と題する記事に於いて、マニ教は一時にはアフリカから中国にまで広がりながら、西はキリスト教の、中央はゾロアスター教の陰謀によって排除され、そしてシルクロードはイスラム教に圧倒された不幸を指摘した。

このように、マニ教にはいちいち不運が付きまとっていたのだが、ではそのマニ教自身に何か他宗教に警戒を与えるような、あるいは民衆による最後の護教運動が盛り上がらなかったような構造的欠陥がなかったのかを、本日は検討してみた。なお、この検討においては単に欠点をあげつらうだけでは足りない。一時はキリスト教やゾロアスター教に脅威となるほどの興隆を見たのであるから、ここでは「盛り上がったと同じ理由で衰微した」と言う深い理由検討が必要である。

マニは紀元後250年ころの人で、時代的にはイエスキリストや使徒パウロよりも後、教父と呼ばれたアウグスティヌスよりも前である。生まれたのは当時新旧の宗教のるつぼであったメソポタミアで、血統的にはパルティア人（イラン系）の貴族の末裔、青年期は父の意向によりユダヤキリスト系で在シリアのエルカサイ教団内で成長した後に、20代で喧嘩をしてここを離脱している。

このようにマニは多感な若いころにあらゆる宗教と接した。仏教にも興味を持ち自らインドに出向いている。トインビーは「文明の邂逅（出会い）」が新宗教である世界宗教を形成する（ハンチントンに言わせれば「文明の衝突」）」としたが、この現象が民族単位でなくマニ個人の内部で生じていたことが良く分かる。

エルカサイ教団はユダヤキリスト系の、今なら異端になるだろう一派で、ユダヤ教により近く、割礼とか安息日とかその他もろもろの戒律を重んじていた。そしてマニにとっては、これらのユダヤ教の諸戒律が無意味な束縛でしかなく、結局「旧約の神は悪い神で新約の神は良い神」と言う異端的な結論と言うか独創的な気づきに達して、教団を離脱した。そして新約でも特に、使徒パウロに共感を持っていたという。

他方でパルティア人としてのゾロアスター教も引き継ぎながらも、「光と闇」の二元的世界解釈を主としてマニ個人の悲観的な性格から、「最後には光が勝つ」と言う伝統解釈は取らずに、「光である魂は地上では永遠に肉体である闇に捉えられたままで、解放されるとしても死後である」と解釈した。加えて仏教の影響として輪廻を取り入れている。

そしてマニの一番独創性の高いところは、これら3宗教を単に混ぜ合わせた教義としたのではなく、3宗教の神話を自分の想像力に任せて換骨奪胎して、彼オリジナルの神話を創作したことだ。そこにはイエスも出てくれば、アフラマツダやアーリマンも、そして弥勒菩薩や阿修羅も出てくるのだが、それら同士の本来の関係や上下の位置、あるいは善悪と言った属性は全く無視して、ひたすら彼の頭の中にある宇宙観をこれらの神々を利用して表現展開した。

マニのもう一つの卓越はその完璧性にある。他の宗教では見られないことだが、その用意周到な性格のゆえに彼は聖典を全部自分で著し、かつこれ以上の聖典は禁止し、また聖典には伝道上の効率も考えて自ら挿絵を描くほどであった。そもそも聖典文字も彼の自作である。そして自分を最後にして最大の預言者であると宣言した。マニ教が一神教か多神教かと問われれば、それはどちらでもない。要するにマニにとって神々はマニ登場の露払い、前座に過ぎなかったからである。

更にマニの完璧性はこの時点にとどまらず、使徒パウロの成功例に学んで伝道を重視した。彼は使徒パウロを評価していたが、聖典では彼に触れていない。つまりパウロ神学でなくパウロの宗教経営技術に主要な関心があったということなのだ。一般にマニのような悲観的かつ完璧症の人は、通常は他人と交わずに静かに一人で山にこもるところ、マニは逆に自分の終末論を広めようとした。おそらく自作の聖典が完成してみたらその素晴らしさに、広めるほうに転化したのであろう。そして伝道の仕方も極めて効率的で、専ら貴族や有力者への伝道であった。やはり伝道効率から、聖典の翻訳も禁止しなかった。

彼の教えと言うか世界観は、当時としては極めて精緻かつ雄大でおよその他の宗教の

及ぶところでなく、人の好奇心を魅了して止まなかった。そのためにどちらかと言うと、一般大衆よりはインテリ層に受けたようである。ただし壮大ではあるが必ずしも論理一貫していたわけではない。神々も必要に応じてこつ然と現れ、用が済むとまた忽然と消えてゆく、そういう意味で神話と言うよりも偉大なサーガあるいは大河ドラマのような面があったと言える。

こうして、効率とドラマと伝道で一旦はアフリカから中国まで広がったマニ教であるが、5世紀以降衰退しはじめ十数世紀以降ほとんど消滅している。そこには運もあるが、この教えの宗教としての限界もあった。マニがいくら優秀でも、人ひとりの思い付きはやはり限界があるものだ。その宗教としての限界とは思うに、①数で圧倒的な一般大衆（凡人）を巻き込めなかったこと、②口約束でもよいから救済の約束がなかったこと、の2点が挙げられる。

マニは禁欲や伝道や不殺生等の良い行いを信徒に教え求めたが、それを実践したらと言って、特に一般信徒は天国に行けるわけでも何でもなかった。また神話が壮大過ぎて、凡人にはその面白さが理解できなかった。マニの完璧性が裏目に出て、こうした欠点を内包したままのこの宗教には、マニ自身は一応殉教しているものの、驚くほど殉教者と聖人が少ない。宗教で最後の踏ん張りを見せるのはいつも一般大衆なのだが、マニの眼中に一般大衆は居なかった。逆に言えば「人の愚かさがマニを殺した」とも言える。

こうして、知恵と壮大さの象徴ともいうべきマニ教は、その究極の意義を人類に伝達することなく地上から消滅した。「消滅させられた」という見方をすれば、これを圧殺したキリスト教とイスラム教は人類の敵であり、人を愚かにした元凶であるとも言える。世の中結局は愚かが勝つのだ。こう言う現実を前に我々現代人ができることあるいはすべきことは、マニの悲観的性格をことさらに復活させるよりも、彼が企図した偉大な知恵の現代版を我々が新たに作ることだと、私は思う。

（注：青木健「マニ教」も参考にしました）

5、蓋然推論の例

先日「非論理の例」と言う記事で、論理が飛躍しているにもかかわらず人間の常識として納得できてしまうやり取りの例を挙げました。そしてこの中のいくつかは、蓋然推論もしくはその組み合わせに還元できます。本日はより代表的な蓋然推論や蓋然論

理について、いくつか例示します。ここで蓋然推論とは、推論に一定の理屈や因果関係はみられるものの、絶対真という訳ではなくむしろ内容が関与する推論のことです。

・宇宙飛行士は帰還するとなぜか農業を始める。

これは全員ではありませんが、毛利さんはじめ幾人か見られます。そして宇宙と言う最先端科学と農業と言う泥臭い経験的手仕事と言う対照的なものが結びついているところに、この気づきの面白さがあります。蓋然推論には知恵や深い経験が関与するので、面白いというのは重要な要件です。端的に言えば、知恵を感じればその該当例は多くなくとも良いのです。ここであえて理由を考えると、①宇宙の神秘に触れて心が洗われたとか、②科学の極限をやってその限界に気づいた、等が挙げられます。米国人で宗教の開祖になった人もいました。似たような格言に、「科学者ほど実は超常現象を信じている」と言うものもあります。

・佐野源左衛門常世は北条時頼の人柄を見抜いたので、虎の子の松の木の盆栽を切った。

この元の話は謡曲「鉢の木」の題目で、「いざ鎌倉」の起源ともなった人情話です。元の執権北条時頼は僧となって領地を回っていたある雪の夜に、1軒の貧しい家に宿を求めます。その主が佐野で、「悪い人に騙されて今は落ちぶれているがいざ鎌倉の時は真っ先にはせ参じる」と、痩せこけた馬を見ながら言います。そして名も知らぬ僧のためにわずかに残った大切な松の盆栽を切って暖を取らせます。時頼は政所に帰り武士たちを招集するとその中に佐野が居り、痩せた馬が笑いものになっています。時頼は佐野の忠義をほめ、広い領地を与えました。

この話で意外と見落とされているのが、佐野の人を見る目です。単なるお人よしや愚かな忠義者なら、人が来るたびに松を切っていてとつくに破産していたことでしょう。ここはやはり、佐野はその僧を見てただ者でないと思ったから松を切ったのです。もちろんこれは私の推論ですが、重要な論点だと思っています。

・「キリストの福音を伝えに来ました」→「間に合っています」→「どうして話を聞かないうちから間に合っていると分かるのでしょうか」

この話は先の鉢の木の話と逆で、形式的な硬直論理に拘泥して知恵がない愚か者の典型です。人は普通、人生の多くの体験から学習して、大抵の事柄にその人なりの相場観や一般則を獲得しています。その一般則に照らすとキリスト教は、「口先だけで裏がある」「日本の土壌にはおよそ異質だ」になります。今の世は有価物や情報が山ほどあって選択に困るほどなのに、明らかにつまらない話にわざわざ時間を割くのでしょうか。もしそんな見え透いた理屈に騙されて時間を割くようなら、その人は正真正銘のバカです。

・「なんでこの高価な茶器が割れているのだ」→「あ、本当だ、どうしたのだろう？」
この人は実は経緯を知っている、もしかしたらこの人が割ったのかもしれませんが。でも関わり合いを嫌がって、あえてとぼけています。要するに相手の議論の土俵に乗らないことによって、非論理に情報を減少させて話をうやむやにしようとしているわけです。ここでも「バカ正直は知恵がない」と言う重要な法則が実践されています。なお、キリスト教では「正直ワシントン」が変に奨励されています。

・俺は義務教育しか受けてないので、難しい話は理解できないよ。
この人の一番痛い点は、「義務教育は高校までを言う」と思いこんでいることです。それはこの人の全体的な態度と物言いから容易に推測できました。つまり、この人の物言いは謙遜のつもりだったのかもしれないが、実は自分が思っているよりももっと教養がない、頭が悪いということです。ちょっと痛すぎです。

・午前中はご遠慮ください。
論理的に理屈を言えば、この言明は午後については何も言っていないことになるが、現実的には大抵、「午後においで下さい」の意味になる。もちろん絶対ではないが、厳密には直観に頼るべきだが、午後に出かけてみる価値はある。そういう積極性を持つ人が、「できる人」です。

・物が壊れると怒られるが、壊れないとこれまた「過剰設備だ」と怒られる。
どっち道怒られるという悩ましい立場ですが、これは現実には良く遭遇する場面です。ではどうしたらよいのでしょうか。どうすることもできません。「問題には考えれば必ず解がある」と言うのは、愚かな人や薄っぺらな人が良く垂れる教訓ですが、実際は解決法の無い問題の方が多いのです。

・私が数学の話を始めたら、数学の大嫌いな娘が大声で歌を歌って茶化した。
すぐ上に描いたような上司に当たると、とてもやりにくい。その対策法の一つは、この例のように話を逸らす、茶化することです。理屈に乗ったら負けです。機械や人工知能にはおよそできない手段をとるのが、最も効果的です。「はい分かりましたと答えてでもやらないで放置する」「なるほど鋭い指摘ですなどと同調して忘れる」のも1つの方法です。

・「スプーンはDIYで買わなくても100均の商品で十分だ」と言った同じ人が、「車のエンジンオイルはけちらずに高目のオイルにしろ」と指示する。
これは表面的には無方針で態度がばらばらに見えますが、実は個々の物の役割と商

品の態様を知っている適切な判断です。表面的な理屈が通る方が実は中身をよく見ないでいて、かえって危ないものです。君子は豹変します。ただし中間管理職程度だと変に平等性と普遍性を求められるので、面倒な場合もあります。

・ラングランズ先生の数理科学の壮大な統一予想と先生が多言語を自由に操れることには、関連性がありそうに見える。

これは私の気づきではありませんが、この話を聞いて如何にもありそうに思いました。数学と言語能力、およそ異なる分野ですが、通底している感じがします。単にこの先生が「頭が良い」というだけでなく、広くかつ細やかに物を器用に見て実践する能力とでも言いましょうか、その手の能力に長けているのです。これはもう理屈抜きに蓋然定理です。

6、マニ教雑感(前編)

<第1部> 百億の昼と千億の夜

もう40年も前のことであるが、異色のSF作家の光瀬龍さんが、「百億の昼と千億の夜」と題する作品を発表した。ジャンルを言えば歴史SFあるいは宗教SFと言うことになるだろうか、そのスケールは日本人離れしていた。

話の主人公はギリシャ哲学者のプラトンである。彼は幻のアトランチス大陸に憧れるあまり、そこに転生(ワープ)してしまう。そして再度ワープするとそこは紀元前6世紀のアジアで、天から「この世の滅亡を自分の目で見よ」と指示される。目の前では若い釈迦が兜率天で弥勒菩薩から、この世の終末を説かれていた。プラトンはこれを何とか止めようと、闇の王の阿修羅に会いに行く。

景色が変わるとそこには方言丸出しの田舎者の解脱者イエスが、訳の分からない知恵の教えを説いている。しかしその上には「惑星委員会」があり、釈迦もイエスもその一員だったのだ。そして「世界の滅亡は委員会の決定事項である」と告げられる。そして地上を見るとそれは光と闇が永遠の戦いを繰り広げる世界、一進一退だが闇の方が優勢で地球を徐々に砂漠化していく。光の戦士として伐折羅大将等の十二神将やタシケントの王たちが出てくるが、とても叶わない。そして世界滅亡の目的は闇の王の阿修羅にも光の使者の弥勒菩薩にもそして光の側の総大将の帝釈天(インドラ)にも分からない。

そうこうしているうちにプラトン、この時点ではもう自分がプラトンだという意識はないのだが、もっと上の天に引き上げられる。そこで宇宙の秘密を告げられ彼は驚愕する

が、その秘密は物語では語られていない。そして地上では偉大なる熱的死が徐々に迫っている。

以上がこの話の大筋ですが、大変雄大な物語で圧倒された記憶がある。この小説は後に女流漫画家の萩尾望都さんによって漫画化されたが、考証等も良くできていて、漫画が芸術の仲間入りをする大きなエポックとなった作品と認識している。そしてこの流れははるか現代の、「RPGゲームの登場人物にそのデジタル性とは正反対の神話や異界のキャラクターを用いる」と言う趨勢のきっかけにもなったと考えている。

そしてこの作品が作られた40年前はマニ教についてまだあまり知られても居ず、またこの小説にマニ教のキャラクターや神話の断片すら出てこないのだが、今つらつらとこの小説と漫画を思い出すと、その世界がマニ教神話の目くるめく世界と不思議なほど類似なことに驚くばかりである。具体的にはあらゆる宗教の混合と、世界の確実な破滅と言う悲観的観点、さらには惑星委員会と言う疑似科学的テイストの登場などである。

この事実を鏡とするならば、マニは悟りを開きそれを文書化したのちに、使徒パウロを模してその悟りを宗教として世界に広めようとしたが、考えようによっては、マニは自作の神話を宗教とするよりも、偉大な叙事詩と位置付けたほうが今の時代まで伝わり残ったのではないか、そう思う次第である。ちなみに今マニ教は消滅したことになっているが、世界のどこかでフリーメーソンのような秘密結社として、人知れず存続しているかもしれない。

＜第2部＞スターリン礼拝

あるとき日本基督教団の一牧師の自己紹介を聞いた。曰く、「私は大学でレーザーによる光の研究に従事し今は牧師として魂の光の研究をしています、私の一生は光の研究です」だそうだ。「そもそも宗教を体験とか瞑想とか修行でなく研究などと言っている時点でこのご仁の宗教は小乗仏教以前、奈良仏教のはるかに手前で、キリスト教の正統かどうか以前に宗教として異端だよな」とか思いつつも、「こいつ、光ひかりって、お前はゾロアスター教の神官かよ」と反吐が出た。

実際キリスト教の光を強調する部分は、善悪二元論のゾロアスター教（拝火教）からマニ教を通してキリスト教義に取り入れられたと言われている。キリスト教とは立派な混合宗教じゃないか。そして多くの政争に陰謀で打ち勝ちかつ運も良かったために今は世界の人口の3分の1も占めているが、政治的に勝ったものをありがたく拝んで「自分も清くなりました」などと言っている人々がたくさんいる、これって本人は大真面目な

のだろうが、不思議な光景だ。仮に開祖がスターリンのような血も涙もない反則王みたいな奴でも、その教えからはきっと聖人が出現するのだろうね。

ちなみにキリスト教は自分より強力だったマニ教をよっぽど恐れたために、それ以後現れる異端には、全く無関係な異端でも「マニ教」とか「グノーシス」と言ったレッテルを張っては征伐してきた。有名なところでは聖ドミニコも撲滅に活躍したアルビジョア派（カタリ派）がある。まあ、ぎりぎり異端にされなかったあたりが神秘家のヤーコプ・ベーム辺りなのだろうが、この程度の神秘思想家、東洋には掃いて捨てるほどいるね。

7、マニ教雑感（後編）

<第3部>アウグスティヌスとマニ教

キリスト教の教父（Church Doctor）と呼ばれキリスト教理の洗練に多大な功績のあったアウグスティヌス、彼は一時マニ教徒であったものの後に嫌気がさして辞め、結局キリスト教徒として人生を終えた。この事実はこれら2宗教の客観的な優劣を決しているのか、それとも単に彼の好みに過ぎないのかを考えてみたい。ちなみにキリスト教側の公式見解は、前者を最終かつ不可避な解決であるとするものである。

アウグスティヌスは物事を根本に立ち返って、すべてを基本から論理的に見極めないで気が済まない気質の人であった。そこで彼はまずギリシャ哲学にあこがれた。「善とは何か」とか「人生とは何か」と言った根本を問う世界である。そしてここで満足する答えを得られなかったのか、彼は次にはマニ教に入信する。彼はマニ教の壮大な神話体系や善悪二元論の明快さそして儀式や芸術の重厚さに知的好奇心を大いにくすぐられたようで、しばらくここに留まった。

だがやがてここも去るようになる。彼がマニ教に感じた素朴な疑問とは彼の著書の「告白」によると、①マニ教は魂にも善悪があると説くが、アウグスティヌスには「魂は常に善であってその外側の意志の段階で善悪が現れる」ように思える、②マニ教は「旧約の神は悪い神で新約の神は良い神」と説くが、そこまで極端に違っているように思えないし旧約にも良いことはたくさん出てくる、の2点がきっかけだったようだ。

この2点は如何にも根本を重視するこの人らしい。そしてアウグスティヌスのような気質の人はやはり彼と似た行動をとったことだろう。だが世の中の人すべてが彼と同じ性向を持っているわけではない。マニ教文書はキリスト教によって全部焼かれてしまったので不公平ながら根拠に欠けるものの、キリスト教の特にパウロ書簡を「説教がましくてお行儀ばかりで程度が低い」と感じ、善悪2元の宇宙規模の壮大な戦いに

参加することにやりがいを感じた人も、おそらくアウグスティヌス的な人と同じくらいしかも特にインテリ層に多く居て、彼らはあるときにキリスト教から足を洗ってマニ教徒として人生を送ったことだろう。

こう見てくると結局キリスト教を選ぶかマニ教を選ぶかは、たとえそこにもっともらしい理屈がついていたとしても、結局は多分に自分の肌に合うか合わないかと言う、いわば「湯豆腐が好きまたは冷奴が好き」程度の個人的な趣味の問題に見える。だからいろいろ理屈などつけずに勝手に好きな方を取れば良いだけであって、そこに絶対的な甲乙などない。もし今歴史に反してマニ教が勝っていたらそれはそれで1つの結果であり、アウグスティヌスなど忘却されていたことだろう。

<第4部>もしマニ教がヨーロッパに伝道されていたなら

マニ教は消えキリスト教は残った。このガチンコ勝負のキリスト教の勝因は、直接的にはローマ帝国への工作が奏功して皇帝から「マニ教禁止令」を引き出せたためだが、キリスト教が現在も存在している理由として当時は辺境であったヨーロッパへの「僻地伝道」が瓢箪から駒で成金して、結局いま世界を引っ張っている欧米の標準宗教になったところが大きい。

であるならばここで、「もしマニ教がヨーロッパにも伝道していたらどうなったであろうか」と問うことは、「歴史にもしもはない」と言う科学的立場からは是認できないものであろうし、キリスト教がその後に東西分裂や宗教改革を経験していった歴史に相当する展開をマニ教に拾えない以上限界もあるのだが、思考実験としては面白いので、ここであえて試みてみることにする。

キリスト教が伝道される前のヨーロッパはちょうど民族大移動が終わりかけたころで、その頃の彼らの信仰は原始的なアニミズムやシャーマニズムであった。そこにキリスト教は文明的体系的なリテラシーとして染み入って行った形である。であるならば同じく世界宗教の体裁を整えたマニ教が先に入って行ったならおそらくやはり浸透したであろう。ここは早い者勝ちである。

現実にはマニ教は、成立時点が250年ほど遅いだけキリスト教より不利であった。まあ多少の競争になるとしてマニ教は、その壮大な宇宙観に鑑みるとドラキュラ伝説を生んだあの鬱蒼とした東欧の景色などが似合いそうだから、根拠地がバグダッドとより東であることも考慮に入れて、東欧とロシア(キエフ大公国とモスクワ大公国)あたりを手中に収めたとするのが穏当だと判断する。つまり今正教系であるエリアが、正教はギリシャに留まりマニ教がその代わりをしているだろうと言う図式になるわけだ。

続いて7世紀にはイスラム教が勃興する。この時点ではマニ教はまだ健在だった。イスラムの成立過程においてキリスト教徒ユダヤ教は妨害をしたがマニ教の妨害は聞かない。マニ教はイスラムに自分の信徒を奪われるかには関心がなかったのだ。もっともムハンマドもマニもいずれも「自分が最後にして最大の預言者である」と自称しているから、「どちらが本物か」の神学論争くらいはあったにしても、マニ教がその主軸を辺境のスラブに移したのちでなおもキリスト教やイスラム教がマニ教を襲ったとは考えにくい。現にエルサレム争奪戦のような衝突要因もなかったし、カトリックだって正教を異端として破門してはいたが、領地争いや境界変更はしなかった。

さて、どの世界宗教にもある改革のエネルギー、キリスト教では宗教改革として現れ科学技術を発達させて先進国になり、イスラムでは多分にスンニー派とシーア派の内部抗争に消費されたが、マニ教ではどうなったであろうか。思うにマニ教も本貫地を得ればいつまでも他宗教のコバンザメでいることを辞め、独自性と差別化を目指して自らの教義の充実を図ったであろう。具体的には一般大衆の救済の色をより強くして、また変に極端な禁欲主義や野放図な聖典拡張もやめて、スラブエリアの国民宗教として溶け込んでいったと思われる。

そうだったとして、このエリアにおける産業革命や先進国へ向けての取り組みはどうなったであろうか。マニ教は二元論とは言え「厳格な粹」という意味では一神教の体質に近いが、「変にイデオロギーにこだわらない柔軟さ」という意味では多神教の体質も持っている。このことからマニ教は、仮に自ら科学技術は発明できなかったとしても現世利益の権化である科学技術を輸入するのにあまり抵抗はなく、要領良く教義の中に取り入れていったと思える。そしてもし今マニ教が存在していれば、「世界は人口の半分が一神教徒」と言うアンバランスな状態は相当に緩和されていたことだろう。

以上のビジョンはあくまでも私の独断と偏見によるものであるが、楽しんでくれた人が居るならうれしい。こういうアプローチも今後はあって良いのではないかと考えている。

8、論文はなぜ難しいか

論文とか法律文書、なぜか理解するのに骨が折れる。素朴になぜであろうか。世の中の事物は弁別意識が働く前には均等に並んでいるので、この観点からはそもそも事物の理解に困難さの違いがあるのは不思議に思えてしまう。だが人固有に生まれながらに備わった本能、およびその目的である自己保存のための状況理解と言う内

的な観点からは、どうしても理解しやすいものと理解しにくいものが出てしまうのだ。ひとえに人の側の勝手である。

そしてその理解しづらいものの典型が、論文や法律文書だということだ。逆に理解しやすいものとしては、日々の何気ない茶飲み話とか、あるいは論文との対比で言うならば物語や小説であろう。ここで小説は一般に論文よりもはるかに長くて、文字数も大量ならば状況もはるかに多岐であろうに、なぜか論文より理解しやすい。もっとも私のように我慢の無い短気な人間には、「小説は長すぎだからせいぜい数ページで要点だけ言ってよ」と言うことになってしまうが。

論文が理解しにくい理由を、より重い順にあげてみよう。①内容が日々の常識とかけ離れていてイメージを作りにくい、②厳密に(きわめて幅狭く)理解しないと理解したことにならない、③前提となる知識(専門用語や他の論文)を多く必要とする、④論理が複雑に入り組んでいて1か所で躓いてももうアウトだ、⑤厳密を期すあまり専門用語を多用しすぎる、⑥遊びの部分がないために気を張り通さないと読み切れない、といった理由が挙げられる。

と言うことは言い換えれば、小説はこれらの要素がないか、みな逆向きだということだ。①内容が日常茶飯事あるいはこの組み合わせだ、②アバウトな理解で全体像(モチーフ)を掴める、③前提知識を特に求めない、④複雑な論理よりも単純な情景描写である、⑤日常用語のみである、⑥楽しますのが目的なので一見無駄な遊びが多い、となる。

例えば吉本ばななの「キッチン」、台所の形と範囲は厳密には家庭ごとに違うのだが、そんなことを気にせずにこの小説は誰でも理解できる。つまり小説においては雰囲気的な幅の広い理解で十分であって、仮にマニアックな台所用具が出てきたとしても、そこを飛ばし読みしても全体理解にほとんど影響を与えない。まあここでその小説が仮に、マーラーの交響曲第5番を知らないと理解が不可能なほどにマニアックなものであったなら、たとえ小説とはいえ事前に該当曲を聴く必要が生ずる。そのようなマニアックな小説が有名になるとは思えないが。

このように、小説の理解が容易、日常会話が理解容易と言っても、それは小説が通例大雑把に分かれれば用が足りることだからだ。つまり一読者が「走れ！メロス」を読むのはたやすく時間もかからない。だがもし読み手が太宰治の研究を専門にした学者であったなら、対象とする小説は同じでも読み方や求められる理解の深さは全く違って来る。

醍醐味という言葉がある。現代では「事物の一番味がある部分」という意味で使うが、醍醐の大元の意味は仏典にあって、2文字とも酒偏が付いているからわかるように何か発酵した美味な食品の名称であったと言われている。だがその味が本当にどういう味だったかは、今は忘れられてしまって再現のしようがない。味とか匂いとか場所とか人の顔とか、聞けばわかるような気がするがあくまでも聞き手の主観によるその体験の結果としての分かり方であって、厳密な感性は決して伝わっていないのだ。だが通例その程度の理解で十分とするから、日常会話や小説は理解しやすいのだ。

とするならば、つまり「人々が皆勝手ばらばらに理解したつもりになっているだけと言う壮大なピエロが世の実態だ」とするなら、どうして多くの人が、「ピカソの絵は素晴らしい」とか「カレーやラーメンはうまい」と言ったように、共通の理解を得られるのだろう。それはやはり、人はそれぞれ個性の揺らぎはありながらもほぼ同じ本能と後天的経験によって成長しているからだ。だから能やオペラのように、人によって熱狂的だったりまるで白けていたり、評価が大きく異なる対象も実は多いのだ。

最後に遊びの問題、例えば反戦をテーマとした映画にエピソード的に恋愛や酩酊のシーンが出てきたりすることはよく見かけることだが、これはどういう位置づけになるのだろう。もちろん論文や法律文書には出てこない。論文等は情報を正確に伝えることが唯一の目的だからだ。ところが小説や映画の目的は情報でなく娯楽や情緒であるから、たとえその部分の情報量が零であったとしても、そこに一種の変化としてあるいは息抜きとして、あるとありがたいことになる。この価値はむしろ「逆情報量」とでも呼ぶべきものだ。

遊びの典型は漢詩の起承転結の転の部分に見ることができる。これは直接の情報量という意味では高くないが、この部分のおかげで漢詩全体の描く世界が雄大になり味わいが増す。しかも視点を転じたからと言ってそれによって全体のモチーフから外れるわけでもなくむしろ×が迫っていることすら予感させる。これの上手い下手はその小説の出来を支配するほどだ。多くの小説家は先ずモチーフ(訴えたいこと)を決め、それに沿って全体の大まかな流れを決め、そして転の部分概念してから着手することだろう。

まとめると、論文や法律の条文は情報の濃さと的確さで勝負するところ、従って冗長度は低いほど優れているところ、日常会話や小説では適度の遊びや冗長性が意思疎通に必要で、それは情報量だけでは測れない、「情緒量」と言うか「つながりの妙」「展開の妙」のようなものの方が重要だということだ。この点はアナログ集合を常に幾

何で見るのではなく、時にはそれらを紡いでいく軌道（トラジェクトリー）に注目すべきだ、幾何のほかに構造とでも呼ぶべき視点と演算があるのだということを示唆している。

ここまで来ると、「真実は1つのはずなのになぜ立場（論文化茶飲み話か）によって理解の基準が異なってくるのだ」と言う問題が頭をもたげてくる。認識する前の自然な状態ではあるいは「真実は1つ」かもしれない。ところが人の認識行為は概念化であるのでどうしても前提がある。それが制限と言えは制限だが、人の限界で仕方のないこと、受け入れるしかない。しいて言えば頭の柔らかい人ほど前提の制限を超えられる。また禅や修行もこの限界を超えるためにある。そして今は出身大学で測られている頭の良さ、これは本来この融通無碍さで判定すべきなのだ。

9、合理的推測過程

推測とは根拠のないところに橋をかける行為であるから、科学には推測はあつてならない禁じ手である。だが良識ある合理的な推測はいわば「蓋然科学」の世界において、推測と断った上であれば、世の中の見通しを極めて良くし、人が根本的に知りたいところを明るくし、好奇心を満たして魂を高揚させてくれる。柳田学、折口学、山本学等の「個人学」が長く人々に愛読され続けるのも、平板な科学にはないこの「知恵の結果による魂の高揚」が存在しているからだ。ここでは3つの分かりやすい例を用いて、知恵による好奇心への橋かけの実態を瞑想することにする。

第1の例は山本学からだ。野口英世の母に関して特に戦前に美談があった。曰く、野口英世の母は家が貧乏で尋常小学校へも通えなかった。しかし向学心やみがたい彼女は校舎の外に佇んで、校舎から聞こえてくる訓導の授業を耳にしつつ自ら学問を学んだ。こうした立派な母に育てられたので、野口英世は世界的な学者に成長できたのだ。

これに対し山本七平は根本的な疑問を呈する。曰く、そんなに彼女が向学心に燃えていたなら、なぜさらに頑張って高等女学校や女子師範学校に進まなかったのか。彼女は実は向学心に燃えていたのではなくて、むしろ人並みになりたかっただけではないのか。この見解は極めて合理的に見える。一見「世の中に偉人なんて居ないのだよ」と言う斜に構えた混ぜ返しのようにも聞こえるが、山本の真意がそこにはないことは前後関係で分る。彼は健全な合理主義を、それまでの日本の過度の精神主義に注入したかったのだ。

山本先生の頭の中の推論過程を私なりに推察するに、山本がこの話を聞いた時に何か素朴に物足りない穴のようなもの、ちょっとした「普通はありえないような不自然さ」を感じたものと思う。特にきっかけは感性であって、最初から論理ありきではなかった。人の頭はそこまで人工知能的な、論理と法則の塊ではない。すべてのきっかけはむしろ、人としての直感のようなものだろう。そして彼はその穴が一体どこにあるのかを、心の中で探し考えた。その結果得た答えとして、「そこまで向学心に燃えた人が尋常小学校程度で満足するのは不自然だ」が浮かんた。

そしてこの不自然さ、特異点を解消させる合理的な説明としていろいろ瞑想した結果、「彼女は尋常小学校の知恵さえあれば良かったのではないか」との仮説を立てた。そしてこの仮説を検証してみた。この仮説が正しいと合理的に通るのは、「彼女はほかの子のように学校に行けない悔しさのみがあったと」するならば、すべてを解釈できる。たった1つの仮説ですべてがすっきりと通ってしまう訳だ。

これは科学ではないものの、その推論方法は極めて科学的で合理的です。こういう素朴な疑問の解決の仕方は、科学に比べて根拠がないだけで、あとはすべてが揃っていて、見ようによっては科学よりもはるかに科学的です。

プロセス☆☆全体観で「あるはずのものが無い」または「無いはずのものが有る」→「それは何だろう」→瞑想により「ここで仮定を1つ入れると全て通るぞ」☆☆

この道筋こそが、合理的な推測の典型ではないでしょうか。大切なのは、如何にももっともらしいことの皮を一枚剥ぐと穴があることに気づく、その繊細さとそれを解き明かす知恵です。

もう一つこの、繊細な気づきとそれを解き明かす知恵の例をあげましょう。それは日本人の心をこの上なく体現した、謡曲「松の木」の泣けてくる話です。先日の「蓋然論理の例」でも挙げたのですが、再度概要を述べます。前の執権北条時頼は旅の僧に姿を変えて諸国遍歴の途上、ある貧しい家に一夜の宿を頼んだ。その家の主の佐野源左衛門は、「悪い人に騙されて今は落ちぶれているが、いざ鎌倉の時は真っ先に駆けつける」と心意気を語り、唯一残っていた松の盆栽を燃やしてその僧に暖を与えた。後に全国の武士に呼び出しをかけた際に時頼は、はせ参じた佐野にその時の謝意を述べ、新たな領地を与えた、と言うものです。

ここでの蓋然推論は私が気付いたのですが、「佐野は旅の僧にただならぬ気迫を感じたからこそ松の盆栽を差し出した」と言う気づきです。もし旅の人に区別なく松を差

し出していたら、キリスト教ではこういう行為が称賛されるのですが、貧しい佐野の松の盆栽はとくに全部無くなっていたことでしょう。これはあまりにも愚かです。人にはもっと知恵とか気迫とかそういった大人の甲斐性があります。決して恩賞目当てではなく、佐野はこの僧にただならぬ気迫と気品を感じたからこそ、松の木を差し出したのではないのでしょうか。まさに啐啄同時、居合切りの間合いです。そして私はこの蓋然推論を自画自賛しています。その心理推論過程は先の山本先生の例と同様です。

最後に、戦後の大宰相である吉田茂のエピソードを基に蓋然推論を行います。彼は豪商の養父から今の価値にして10億円を超える遺産を受け継ぎましたが、結局全部使ってしまいました。そして養父の墓に詣でて「ごめんなさい全部使っちゃいました、でも勲章をもらったから許してね」と報告したそうです。さてここで吉田はそれほど大金をどこに使ったのでしょうか。ちょっと贅沢をした程度でなくような金額ではありません。そうかと言って一国の総理となって進駐軍とやり合ったような人が、競馬やギャンブルですったとも思えません。

私は、吉田はその金を、自分が結党して総理総裁になるための資金に充てたと推測しています。選挙はその人に才能があってもそれだけで当選するものではなく、街宣や民心掌握等に資金が必要なものです。そしてだからこそ、「遺産が勲章に化けちゃったけど許してね」となるのではないのでしょうか。ちなみに彼の好敵手だった鳩山一郎の資金源は、児玉機関の児玉誉士夫からの上納金だと言われています。この上納行為により、小佐野賢治は訴追されたのに児玉は追及されていないという訳です。

以上の例のように蓋然推論過程は、根拠がない以外はむしろはるかに科学的でありかつ人として健全な推論手続きだと思います。根拠がないのですが「絶対真」とは言っている訳でないので、ペテンではありません。また根拠がない分だけヒントが少ないので、その分推論に冴えわたる上位の知恵と気づきが必要になります。そしてこの知恵の冴えこそが、科学の外に存する蓋然世界における知恵と気づきの蓋然推論の、典型的方法論であると言えます。

10、相対の中の絶対

本日は、イスラム教についての素朴な疑問から始める。なぜあの宗教があれだけ熱狂的に受け入れられたかである。思うにこの理由は究極的には、開祖のムハンマドの「商人であり無学であり貧乏でもあった」という庶民的な出自と人柄から湧き上がる、強烈なエネルギーと言うことだろう。圧倒的多数である一般庶民を味方につけるのに成功したわけだ。しかもその勝ち方は極めて戦闘的であり、その勢いで立教後50年

の間に西はモロッコからイベリア半島まで東はペルシャまでを、武力で瞬く間に征服した。

加えてパフォーマンスの要素もある。異教徒からは面倒至極だと思われそうな、1日に何回ものメッカに向かったの礼拝や一生に一度は義務の聖地巡礼も、見方によっては体を動かす体験型の参加意識醸成になっていて、一度参加すると百の理屈をこねるよりも、直接に熱狂しやすい要因であると思われる。

ところでイスラム教はキリスト教より後発な割には、女性にヒジャブやブルカを強制したり、結婚式も男女別にやったり、家の名誉を守るための名誉殺人があったり、あるいは豚は禁止で他の動物もハラール（聖別）でないと食べられない、アルコールは禁止、天国は美女だらけと言うビジョン等々、およそ意味のない古層の慣習や利益誘導が取り入れられている。

これらは文明論的には退化した要素であろうが、この宗教にはこれらの不便を乗り越えるだけの庶民性と、後の学者が体系化したムハンマドの言葉がある。そしてムハンマドの言葉は彼が苦労人であることを反映して慈悲と寛容に満ちているために、言葉と慣習がちょうど飴と鞭になって吸引力を有しているのであろう。

ではその慈悲と寛容の宗教であるイスラム教が、なぜイスラム国(IS)と言う「鬼子」を産んだのであろうか。この直接の原因は思うに、現在の世界標準を欧米キリスト教徒と言う最悪の異教徒が牛耳っていることへの、強烈なプライドと反抗意識であろう。この意識がちょうど「十字軍に対抗するジハード」と言う形で、世界中のイスラム教徒を共鳴させて結集する結果になっていると考えられる。

もちろん彼らISは、クルアーンの中で自分たちに都合の良いところのみを強調して読んでいる。だがキリスト教だって学生運動崩れの牧師が山ほどいて社会派と称し、反米や階級闘争のところばかり引用して司式したりしているから、この手の「分厚い聖典からのつまみ食い」は一神教に多分に共通であろう。そして仮に彼らが都合の良いところだけを引用しているにしても、そう引用できてしまうポテンシャルはイスラム教や一神教の根っこに存在していると言うべきだ。

ところで、本能的な学習欲を理由に同じイスラムの男性たちの反感を買って銃撃された、ノーベル平和賞のマラウさんがしきりに訴えるのは「教育の重要性」である。だが「イスラムに教育がないのか」と問えばむしろ逆で、イスラム神学の壮大な体系を持ち、これも人々のイスラムへの改宗の大きな原動力だった。特に北アフリカでは、リテラシ

一（基礎教育）と言えは即イスラム教とクルアーンの音読なのである。

彼らはイスラムのおかげで、マドラサ（イスラム学校）でシャーリア（神学や法学）の勉強ができるのだ。その教義はアニミズムやシャーマニズムよりもはるかに体系的で、論理力を身につけてくれる。実際ルネッサンスにおいてヨーロッパにギリシャ古典をもたらしたのは、外ならぬイスラムの学者たちなのである。

ただ宗教教育は一般に、「あるところまでは育ててくれるけれどもその許容限度以上に育つのは許さない」と言う、あたかも亀の甲羅のようなところがあって、結局学習の自由は限られているのだ。そしてマラさんが教育という言葉で訴え求めているものも、究極的には個人の尊厳と選択の自由だと思われる。

人は誰でも本能的に、洗脳されない限り自由を求めている。もちろん集団生活においては制限される自由もあるが、それは最低限であるべきだ。国の役目は究極的に、セーフティネットの設置だけで良い。こういう至極当たり前の項目を、それも多数の血を代償にして勝ち得たのが、フランス革命とそのスローガンである「自由・平等・博愛」だ。この最も当たり前のことが、当たり前にもかかわらず大騒ぎしないと、それもキリスト教プロテスタントと言う宗教的にはほとんど異端なほど薄いものの上でないと、人類は得ることができなかった。人とはかくも愚かなのである。

そしてこの自由・平等・博愛、私はこれに「尊厳」を付け加えたいが、これらの一度は獲得した基本的人権が、今後も守られるなどと言うおめでたい保証はない。常に努力していないと、人の愚かさによりいつ暗黒時代に逆戻りしてもおかしくないのだ。実際イスラム教から見れば彼らにはイスラム法と言う完全な法律があるのであって、「自由～尊厳」と言っても「それは単にキリスト教のローカルルールに過ぎなくて我々には関係ない」と言う位置づけになってしまう。日本だってもしネット右翼の主張するように戦前の家制度に戻ってしまえば、「自由～尊厳」など元の本阿弥だ。一度獲得したものが絶対になくならないなら、なぜかつて老子や孔子を生んだ中国が今あれほど人権弾圧に走っているのか。

だからこそ今宗教対立で見たような、あるいは数学の定理や公理系に見るような、「何でも相対的」な価値観の時代にあって、「本当に絶対的なものはないのか」と深く自問してみよう。それはひとたび正気に戻って客観的思考をするならば、これだけは絶対的かつ普遍的に価値があるのが「自由～尊厳」なのだ。そしてその大元の根拠はひたすら人の本能にある。

であるならばこれらの絶対的徳目に本来の絶対的地位を与えるために、人類の明るい未来のためにまず必要なのは、「自由～尊厳」をキリスト教から切り離し、彼らの手柄とか所有物でないように位置づけることだ。これらを宗教や信条に依らない絶対的な恒久的価値と正しく位置付けないと何も始まらない。キリスト教だって、「我々はご利益宗教ではない」とか「神は行いでなく心を見る」とか言いながら実はこの上なく成功報酬主義であるという、言行不一致の傲慢がある。キリスト教だってローカルな一宗教に過ぎない、これは明確に認識すべきだ。

「自由～尊厳」の不変的価値は何らの特定の思想信条の所有物ではなく、それらの上に位置するものなのだ。そしてあらゆる宗教や信条は、この普遍的価値を旧来の伝統や慣習より上に置くように自ら変化し進化していく義務がある。宗教だって生き物であって、留まったら濁って死ぬのだ。人のために宗教があるのであって、宗教のために人があるのではない。

最後に「尊厳」を追加した理由を短く述べる。多くの宗教は「父母孝養」を謳っているが「子供の尊厳」は語っていないという片手落ちから、世の中で年長者による年少者の搾取や土足での踏み込みが平然と行われている。この幼稚な穿き違いは尊厳が最良の治療薬だ。もう一つの理由として、本論では通して本能と喜びを人の生きる基本に置いているが、ここでの喜びとはギャンブルとか快樂でなく、個々人の世界や経験や視野が広がるような向上の喜びであってほしい。そのためには「自由・平等・博愛」では言い尽くしていないと思うのである。

11、荒城の月に見る起承転結

先日「論文はなぜ難しいか」と題した記事で、主として文学や芸術で用いられる「遊び」、あるいは起承転結の一見無情報な「転」の積極的な効用に触れた。本日は日本の代表曲である「荒城の月」を例に、転のあり方について詳しく見たい。なお、「荒城の月」と言えば滝廉太郎であるが、滝は作曲者であって本日見る歌詞の方は土井晩翠の作である。短調の曲は歌詞のもののあわれと良くマッチしている。

歌詞は4番までであるが、まず1番を見よう（以下MSワードのエラーを避けるために最低限の改変をしてある）。

1、春高楼（こうろう）の花の宴（えん） 巡る盃（さかづき）影差して
千代の松が枝（え）分け出（い）でし 昔の光今何処（いづこ）。

ここで花とは桜である。1番は城の高楼における武士団の夜の花見を歌っている。ま

ず、この歌詞は2小節ごとに4部分に分かれ、それらが小さな起承転結を成している。具体的には起で春の高楼の花見と設定をし、承で同じ場面での次の絵を出し、転で情景を城の一部から城を囲む環境空間に大きく広げ、そして結で1番のまとめとして、城も武士も栄華はすべて空しいと結論している。

ここで3小節目の「千代の松が枝…」をたとえば、「武勇の誉れ語れども」とか「能の見せ場の華やかさ」とか歌っても、意味は通じるしそれなりの情景ではあるのだが凡庸の感は免れない。ここはやはり「千代の松が枝分け出でし」とした方が大きく転じている。そしてその効果として高楼や松、ひいて宇宙の余白に吹く風の虚しさ寂しさが、無言で伝わってくる。

2、秋陣営の霜の色 鳴きゆく雁(かり)の数見せて
植うる剣(つるぎ)に照り沿ひし 昔の光今何処(いづこ)。

2番にも小さな起承転結がある。1番との違いは転の部分で視野の拡大とは逆に、剣と言う武士の象徴物に視野が凝縮していることである。と同時に、2番は1番の大きな起承転結の承の部分になっている。季節は反対の秋だがやはり季節を受け継いでおり、最後は同じ「昔の光今何処」で×ている。

3、今荒城の夜半(よは・よわ)の月 変はらぬ光誰(た)がためゾ
垣に残るはただ葛(かずら) 松に歌うはただ嵐。

3番内の小さな起承転結は、他の番と比べて顕著でない。つまり破調になっている。破調とは転の転である。こうして新鮮な変わり身を見せた上で、大きな起承転結の転つまり大転として、季節や武士の存在を背景に引っ込めて、むしろ全体としての無常観を草木や石垣を用いて表現して、結の準備としている。月と言う語がようやく出てきた。

4、天上影は変ワラネド 栄枯(えいこ)は移る世の姿
映さむとてカ今も尚 ああ荒城の夜半の月。

4番は再び小さな起承転結が回っていて、その意味で落ち着いている。この番の結の部分は、題名と同じく「荒城の月」である。つまり歌詞の最後で謎が解けている。そしてこれが歌詞全体の結論になっている。つまり「天は不変、地は栄枯盛衰、昔栄えた物ほど衰えると空しさも強いのだ」と言うことだ。まさに諸行無常である。季節から初めて城が出て草木が出て月の光が出て、そしてそれらが総じて語るのは、すべては

移ろいゆく世の道理である。

以上で荒城の月の歌詞の解説はできたが、ここまでなら今更話題にしなくても多くの人が学校で既に習っていることだろう。そこで転の役割、特にその気づきの種類と情報的価値とアナログ的位置づけに注目してこの歌詞を見ることにする。先ず転の部分の役割をまとめるとそれは、①視点の転換による広がり、②破調によるマンネリの打破、③結への準備・予告の3つであることが分かる。

つまり転を作るにはそれ以前とできるだけ種類が異なり(直交していて)、しかも結論の収束に向けるような、そういった知見と気づきが必要だ。歌で歌うのは、たとえ歌詞が上辺は外界の具体的な情景であっても、実際はその情景に映し出された心境であり、心境と言うことは人によって揺らぎを持ちながらも共通的方向を目指す、多面的で非数字な情報量である。そこで転では一般に、似ているものを連想するのは楽であるところ、「できるだけ異なるものを探せ」という命題は未開地の開拓のようで決して容易ではない。

と言うことは転に必要な情報の種類として広くて深い気づきと体験を要し、それにかかわる情報的価値は極めて高いが、さらに大事なことは、そこで用いられた情報のほとんどは背景に隠してあえて余白として、表に出てこないことである。この「隠された情報量」、これは転ならずとも文学や芸術のモチーフ一般にとっても、その全体の出来の良いか悪いかを左右するほど重要なものである。しかも重要性は従来のデジタル情報理論では測れないものである。

そしてこの知恵の部分があえて秘されているからこそ、読者や聴衆は興味を惹かれて、隠された部分をそれぞれのやり方で埋めようと、自ら参加しようとするのだ。世阿弥が著書の「風姿花伝」で提起した「隠す」いうことの大切さ、それはそうすることによって一般大衆の参加を誘引すると言う「穴」となるからである。この「穴」をうまく見つけるコツ、これは以前に「合理的推測過程」なる記事で提示した、「気づきにぐく隠されている所を知恵で見出す」のと同様のプロセスである。

更に言うならば以前の記事で検討した、「なぜ吉田類は面白くて太田和彦はつまらないか」あるいは「なぜイスラムは栄えてマニ教は消滅したのか」の議論とも通じていて、大切なのは表面的な情報の多さではなくて、むしろ一般が参加できるような穴をわざと作って誘い込めるかどうか、端的に言えば情報が少ないかどうかの勝負なのである。この辺も従来の「多ければ多いほど良い」とする情報理論とは異なっている。安寿と厨子王のような理不尽物が受けるのも、思わず手を差し伸べたくなるからだ。

なお、世の中の美の分布を見るとき、凡庸の方が圧倒的に多いという意味で、美のアナログ集合はカラーピッカーのような密な状態ではなく、むしろ空間上に孤立して存在していると考えられる。つまり、この孤立状態をどう表現するかと言う課題が新たに出てきて、しかもそれは円と三角形と補助線のユークリッド幾何の大人版になるのだ。これはまだ十分に瞑想できていないので、今後とする。

12、アナログだった時代



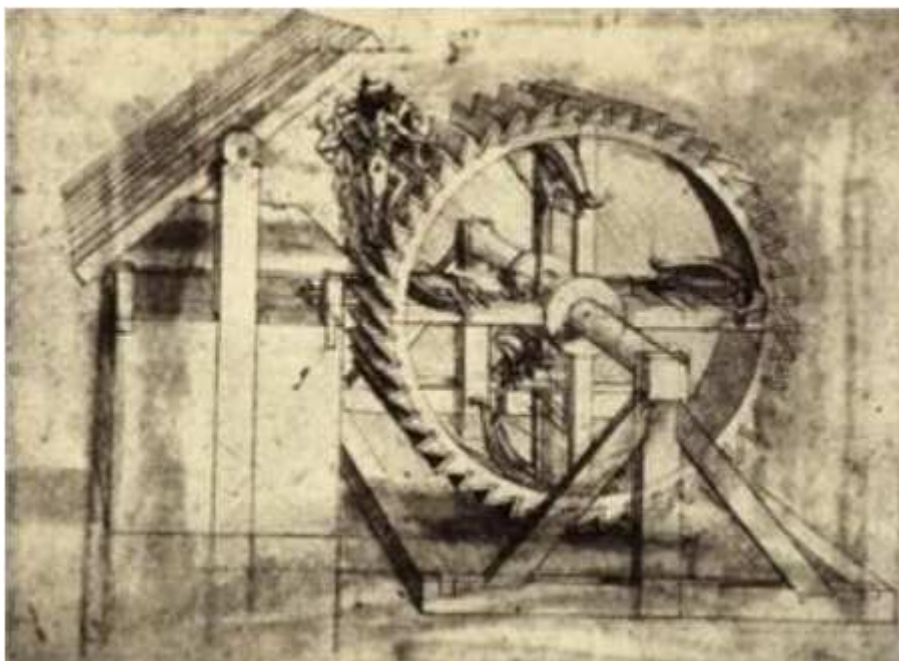
現代は専門細分化の時代で、効率と収益が最優先され、そのためにはやりがいとか人格形成は無視される、1億総社畜のちぎられたデジタルな時代であり、かつそれが世の中の当然の常識のようにになっている。

たしかに日進月歩の日用品のおかげで私どもは、例えばインスタントで店屋物以上

のラーメンを食べられるし、美容室に行かなくても白髪染めもできちゃう。こう言う小技はすぐに何百でも数え上げられるが、小技である以上どう見ても無名の社畜さんたちが、業績評定と給料上下と言う飴と鞭に踊らされて、鵜飼の鵜のように吐き出した「成果」だ。現に恩恵を被っている私どもが文句を言うてはならないのだろうが、彼らが本当に自分の工夫に満足を感じているだろうかと素朴に首をひねる。ひいては、「不便だった昔の人々は現代の我々よりもずっと不幸だったのだろうか」と、疑問に思うのだ。

そこで、現代のような無数の無名な企業戦士の時代と対極にある、天才の時代とその生涯を見てみよう。具体例はレオナルド・ダヴィンチである。ダヴィンチは15世紀後半、日本で言えば応仁の乱から戦国時代初期に生きた人物で、その多芸性と高い絵画力から天才と言われている。彼は絵画のほかにも、新型兵器や都市設計など当時最先端の工業的アイデアをたくさん出して、もちろん当時は電磁力も蒸気機関もなかったものの、彼の作品はいちいち独創を超えて奇想天外の域にある。つまり純粋にアイデアとしても楽しめるのだ。発想の奇抜さである。

だが、それらダヴィンチの発明は本当に使えるのかと聞かれれば、実は当時の常識でも作品のほとんどが実用的ではなかった。そして実用的か否か以前にそれらはそもそも作れたのかと言うと、やはりほとんどが自重でつぶれてしまうかあるいは目的とする機能のための引っ張り力で座屈してしまいそうで、およそ作れるとは思えない。今風に言えば姉齒物件なのだ。結局彼の作品は実用と言うよりも娯楽であって、特許と言うよりもアニメの世界の傑作なのだ。ちなみに下の図は自動連続弓打ち機、そしてトップの絵は機関銃であるが、正直笑える。



ただ私はここで以上の見解を、ダヴィンチをくさすために、あるいは彼の天才性を否定するために挙げたのではない。むしろ逆に彼のアイデア力に驚嘆していて、「アイデアの面白さに比べればそれが使えるとか作れるか儲かるかなどと言うことはどうでも良いことだ」と主張しているのだ。だいたい「ちょっと工夫すればできる物を確実に作っていく」と言うのは社畜の仕事ぶりであって天才のそれではない。

そもそもこの時代は現代のように専門分化されておらず、だれでも自由に何でも物が言える夢のある良い時代だった。しかも当時は自由な時代を反映してコンペが盛んであったが、ダヴィンチがあれだけの才能にも拘わらず嫉妬され足を引っ張られたと言う記録が全くない。この自由精神は人工的な限定の無いアナログ精神であり、私自身のライフワークであるアナログ集合と蓋然論理と通底しているので、私はなおのこと彼に親しみを感じこの時代に理想を見出す。

そしてその背景にはルネッサンスと言う文芸の自由精神の時代があり、かつフィレンツェ等の自由共和国もあって、これらがダヴィンチをしてその才能を自由に発揮できる環境を与えた。その意味ではダヴィンチはラッキーでもあった。もちろんダヴィンチは天才であるが、では中世暗黒時代にダヴィンチほどの才能の者が誕生していなかったのかと言えば、そういうことは考えにくい。中世のダヴィンチは不幸にも才能を開花できなかったのだ。

そしてダヴィンチと同じく哲学文芸から科学技術に至るまで切れ目や区別なしに活躍した万能の天才に、デカルトとパスカルが居る。彼らの地はフランスで時代は17世紀前半で日本なら江戸時代初期である。次いでやはり天才のニュートン、彼の地はイギリスで時代は17世紀後半、そして「百科全書派」と言う万能人が活躍したのは18世紀なのだ。つまりつい200年前までは「専門にあらねば人にあらず」と言った非人間的な不自然な夢の無い状態はなかったのだ。

つまり、システム効率志向で世の中が変に分割されてつまらなくなったのは高々ここ100年程度のことであって、長い人類史から見ればほんの一瞬であり、決して人類にとって当たり前ではないのだ。私は最近縄文時代の発掘展示を見に行った。時代的には今から3000年くらい前である。石と土器と火くらいはあったが、稲作はまだだ。さぞかし毎日飢えていて幼児死亡率も高く寿命も短い暗黒な時代かと思っていた。

ところが、もちろんプラスチックもコンクリートもなく材料は限られていたものの、クジ

ラやシカの骨で工具を作り、植物をほぐして縄や網籠まで作り、丸太を敷いて沼地を整備し等々、極めて多才である。その、あらゆる身近な物を使いこなす知恵と工夫は驚異的で、知恵の豊かさ多様さから言えば現代人の方が明らかに劣っている。縄文人は現代人よりもむしろ豊かな暮らしをしていたのだ。もちろん社畜などいないしノルマも階級もない。1日の労働時間は3時間程度だったと言われている。これには考えさせられた。

ところで、アナログ集合の立場は連続体を正面からとらえて単なる点の集まりとしないとするので、必然的に個々の文物の具体的な形に注目することになる。例えば志野や織部とはどういう焼き物か、どうして美しくかつ存在感があるのか、どこまでが志野や織部か、それら同士の関係はどういう位相にあるか等である。以前に「知恵の本質」で触れた、町田市の形と位置もこの一例だ。現代数学の幾何学が幾何とはいいながら群論と言う代数でしかなく、従ってきわめて抽象的なところにしか触れられない、目の前の文物にはわずかにかするだけと言うのに比べれば、はるかに画期的かつ現実的である。

ここに本当のしかし初等でない幾何がある。中高で習うユークリッド幾何、いわゆる円と三角形と補助線の幾何は、幾何を正面から扱うという意味で本来幾何の王道でありながら、現代数学に占める位置は極めて端で鬼子のような。幾何の立場からは形にもっと注目しつつも円と三角形と言う幼稚さからもっとフロンティアに進みたい。そしてこの王道の本当の先にある分野こそがアナログ集合論だと考える。そしてこの「形を正面から素直に受け取る」という精神が、かつてのアナログだった良い時代の回復をもたらす。

ただその切込みにおいては、「なるほどアナログ集合のおかげで物の見方が変わった」と言うような具体的なご利益がないならば、わざわざアナログ集合などを持ち出すのが単なるこけおどしになってしまう。ここにもっと瞑想する余地がある。つまりもっと工夫しないと、かつては本来であったアナログの時代、天才の自由精神の時代は取り戻せないのだ。

13、蓋然推論の例(その2)

・絵画等芸術に対する評価

これは多分に個人の好みに依存する。例えば能やクラシック音楽は、熱狂的なファンの人でも居れば、まるでつまらないという人もいる。ところが多くの人がピカソやゴッホは上手いと思う。また荒城の月は心にしみると言う。蓋然推論の特徴として、推論自体

が蓋然であるだけでなく、蓋然性があるか無いかも多分に蓋然なのだ。

・お隣さん同士

仲が悪いことが多い。利害関係が相反するからだろう。だからこそ「近所は仲良く」と言われる。諫言があるということは、それを必要としているまずい状況があるという事実を暗に指摘している。

・暗黙の前提

「株式相場に競馬以上の社会的価値があるのでしょうか」と言う問いには暗に、「競馬にも相当の社会的価値がある」と言う前提が含まれている。上のお隣さんの例もそうだが、暗黙の前提こそが真の意味のある形式論理ではないか。この形式推論を人工知能はできるだろうか。なお、蓋然論理はそのさらに先にある。

・犬はかみつく、人は裏切る

一般則としては真であるが、盲目的に真ではない例。

・マネージ屋から研究職への指示

「概略でも良いから早くそれなりの解を出せ」→かなり乱暴だが概略の解を提示する
→「解決したのにいつまでやっているのだ」

・言葉のイメージ

アニメ「タイガー&バニー」は硬派のガンダムみたいなアメコミだが、私が最初にこの題名を聞いたとき、「酔っぱらった虎おじさんがかわいいバニーガールに『いよお、姉ちゃん』などと絡むような与太話」を想像した。これも一種の蓋然推論であって、外してもしばしば面白い。

・超帰納法

「MSCONFIG」と言うコマンドから、この唯一のヒントをもとに、「MSさえ付ければ一見の普通名詞を固有名詞に確定することができて確実に検索しやすい」ことに気づいた。マイクロソフトはオフィス、ワード、ウインドウズ、エッジ、フォト等普通名詞をそのまま固有名詞にすることが多いが、これに対する対抗策の発見だ。わずか1例で法則に気づく、これはもう帰納法を超えた「超帰納法」と言える。そもそも帰納法は蓋然推論の一種であるのに、「演繹論理だけだと当たり前しかなくて貧弱すぎる」と言う、科学の見掛けとは逆のご都合主義で、帰納法を強引に「確定論理待遇」にしているだけだ。

・画像記憶

「さっき消防車のサイレンが聞こえていなかった？」「そういえばそうだったね」。このやり取りで分るように、人はしばしば環境を感じたままに概念せずに記憶している。この例でも指摘があって初めて、画像記憶を思い出してこの時点で改めて概念化している。自国語は分かりやすいが外国語は顔を耳にしないと理解できないのも、この感じたままの記憶をする余裕が脳にどれだけ残っているかと言う点に依っているのではない。画像記憶自体は蓋然推論ではないが、人の脳の働きを見る上で重要な一石となっている。

・最低限の思想統制

大阪商人が「儲かっていますか」と聞かれると常に「だめですよ」と答えるのはワンパターンに過ぎる、つまり思想統制にも見える。だがここで「儲かっていますよ」と答えば隙だらけで、「私から盗んで下さい」と穴場を教えているようなものだ。つまり思想統制を超えたもっと上位の法則が作動している。こういう時点での制限は仕方ない。

・真の回答

「そばとうどんとどっちが好きですか？」と聞かれて、「それぞれ良い悪いがあって一概に言えないですね、私は交互に食べていますよ」と答える。この答えは問いに正しく対応していないが、しかしこの方が心の思ったままなのだ。人は機械翻訳でないから、やり取りに於いて表面ではなくその心を読む。その結果論理的ジャンプは当然にあり得る。心は元来論理的でなく、心のままの答えの方が自然だ。

・人の推測の限界

ブログを最初に考案した人は、そのブログが10年後にはほとんど老人専用のツールになっているだろうとは、およそ想像できなかっただろう。この意味においては、「事実は小説より奇だ」と言えるし、「だから世の中は面白い」とも言える。

・中身の推測

例えば料理について、写真を見てあるいはレシピの記載だけからその味をイメージできると言う人の想像力には、驚嘆するものがある。脳の働き方の典型的な在り方の1つだ。

・指摘されればごもっとも

「今度の土鍋の方が深くて、うっかり具をたくさん入れちゃいそうなの、店の人が『壁が高いほうが吹きこぼれなくてよい』というから買ったのだけど」→「吹きこぼれ防止と言うことなら壁は高いままのほうが良いから、具たくさんにするのは筋違いだ」。人は通常理屈では納得しないものだが、これはデジタルに納得できる例。

・配慮を超える事実

「残ったワカメを鍋の端に入れて良い？」→「真ん中に入れても同じだろう」。これを受け入れるか否かは、状況や環境による諸条件の優劣の総合による。こんなつまらないことでも判断には瞬間的に、膨大な脳の作用がある。

・口先よりも総合的態度

『いいね』を押して応援してください」と言う書き込みに、「嫌です」と答えるのは下策だ。下手をすると逆切れされて絡まれる。答えが何であろうと相手にしている時点で下策だ。普通は無視する。ちょっと上等な手段としては「ふーん、大変だね」などと他人事で答えて、興味がないことを態度で示す。

・物事の理解

概略から細部へ向かう。これは本能にもなっている。ただ、手始めの概略は必要なのに、しばしば「厳密でない」との指摘を受けると言う矛盾がある。この情報過多の時代にあっては、厳密性よりも一言性の方が、しばしば重要ではないか。

・蓋然推論のリスク

もっともらしいので反って危ない。迷信や流言の妄信につながることもある。重要なのは、蓋然推論で十分なのかそれとも科学的手続きをあえて要するのかを、事案ごとに見極めることだ。

14、「シクラメンのかほり」の面倒くささ

以前に、インテリ小椋佳の歌が理屈に偏りすぎだと指摘しましたが、本日は彼の代表作である「シクラメンのかほり」の1番を例に、その具体的な態様を見えます。まず、歌詞を以下に掲げます。

真綿色した シクラメンほど 清(すが)しいものはない
出逢いの時の 君のようです
ためらいがちに かけた言葉に
驚いたように ふりむく君に
季節が頬をそめて 過ぎてゆきました
疲れを知らない子供のように 時が二人を追い越してゆく
呼び戻すことができるなら 僕は何を惜しむだろう

1番の歌詞とリフレインは以上です。これを見る限り厳密な意味での理屈や論理はありません。むしろ「冬が来たら春は遠くない」とか「朝の来ない夜はない」と言ったフレーズのように、見かけは単純な論理に過ぎないのになぜか人を感動させるものもあるのと、逆ですらあります。そしてこの歌詞の特徴は、BGMとして聞き流しているうちは何となく歌詞とメロディの雰囲気になんとなく合っていてそれなりに耳触りが良い。

けれども、実はその程度で居られるのは内容をほとんど理解していないからだと言うことです。単に「花が咲いて出会いがあって気が合って季節が過ぎていったね」くらいの認識であって、その程度だから気持ちも良いのです。間違っても具体的な内容を理解しようなどと思っただけです。頭が疲れるだけです。その理由は内容がマニアックすぎて極めてイメージしにくいと言うことです。

それでは最初の2行から始めましょう。先ずシクラメンは中東原産の外来種で古来の短歌等にも歌われていないので、日本人のDNAに染みた印象がない点を挙げます。それをやれ真綿色だの、うす紅色だの、うす紫だの、およそ聞きなれない、本当にそんな色のシクラメンがあるのかも怪しいような色で色分けや使い分けをされても、およそピンときません。真面目にイメージしようとする、方程式を解くほどに概念を切り立たせなければならなくて、むしろ頭が痛くなります。

そしてその真綿色のシクラメンが、反語的最上級と言う高度技術で「すがしい」と言われても、そこまでかなあとか、大げさ過ぎるじゃないのと言う気がしてきます。出だしから、昨年末の安倍首相の戦後70年談話のように高度に設計されすぎていて、ちょっと取りつきにくいですね。スタートからいきなり一般大衆を、実ははねつけています。極め付きにそれぞれのシクラメンが順に、出会い、恋する時、後ろ姿だそうです、混同するだけでおよそ色と結びつきません。

続いて中の2行です。この部分は要するに彼女が、「呼びかけたら振り向いた」とそれだけのことを言っているだけなのですが、あえて助詞の「に」を実に4回も使って歌詞を意味なく4分割して、わざとイメージが沸かなくしてあります。しかもこれは別に韻を踏んでいるわけでもありません。2番以降は「に重なり」はないですが、わざわざ4重形容句にして難解化してある状況は同じです。

そもそも出だしから通してそうなのですが、この歌詞の特徴は遊びが一つもないことです。冗長度が零なので、どこか1か所でも理解しそこなうと絶対に全貌理解に至れません。つまりこの歌詞は見かけこそ文学風ですが、理解に要する能力と態度から言えばむしろ論文だと言うことです。普通の歌の歌詞は、そもそも歌詞と言うのは短い

ので多くの情報が入りえないのにもかかわらず、その半分以上が情報量は零の遊びであることが多いのです。例として以下に「おおブレネリ」の歌詞を挙げましょう。

おおブレネリ あなたのおうちはどこ
わたしのおうちはスイツランドよ
きれいな湖水のほとりなのよ
ヤッホ ホトゥララ(何回も繰り返す)

「ブレネリさんと言う女性がスイスの湖の端に住んでいる」と言うどうでも良い情報しか入っていませんが、イメージは沸きやすいです。プロトタイプそのもので頭を使う必要がないからです。これが、一般大衆が普通に聞いて楽しいと感じる歌詞の相場です。

シクラメンの歌に帰って最後にリフレインの2行を見ます。「子供が疲れを知らない」これは普通に理解できます。この歌詞で唯一安心できるところです。言い換えれば秀才小椋佳がうっかり盛り忘れた部分です。でも「子供のような時の追い越し方」、これどんな感じでしょう。何とかイメージできますか？そして更にそれを呼び戻したい、一体何のためなのでしょう。極め付きに畳みかけで再び反語最上級で、「できたら何も惜しまない」、そこまで惜しまないものとは何だろうかと、訳が分からなくなってきました。

私のような凡人に唯一分かるのは、「最上級を2回も使うのは反則だろう」と言うことです。あたかも俳句の季重なりのように、2つの反語最上級が衝突し合って互いに喧嘩し弱め合っています。「そこまで力まないと歌詞のつまらなさを隠しきれないのか」と勘繰りたくなるほどです。

以上まとめますとこの歌詞は、①遊びが全くない、②抽象句や多重形容句が多すぎ、③繋がりにくい言葉の連結が多すぎ、④力みかえりすぎ、の4要因により私のような凡人には理解不能、イメージ化不能になっています。彼の名誉のために断っておきますが、彼は利口ぶりのこけおどしでこの歌詞を作ったのではなく、お茶を飲む程度の気軽さで出来ちゃっているわけです。こんな歌詞をすらすら苦も無く思いついちゃう小椋佳と言う人は、やっぱり東大卒の名に恥じない秀才でした。そして彼の他の歌はもっとイメージしにくい、少なくともどこがおもしろいのか全く分かりません。

ちなみに私が論考途中で見本的な歌詞として挙げた「おおブレネリ」、実はこれにしても膨大な論考が存在しています：

<http://www1.odn.ne.jp/mushimaru/bakaessay/breneri.htm>

ぜひこの論文の方にシクラメンの方も分析していただきたいと思います。きっと何百ページにも亘ることでしょう。

15、おおブレネリの謎

先日「シクラメンのかほり」の記事で予告したように、この歌とは対極にあって極めて理解しやすい歌である「おおブレネリ」にも、看過できない深い謎があると主張する人が居る。

<http://www1.odn.ne.jp/mushimaru/bakaessay/breneri.htm>

本日はその「筆先三寸さん」が著した「おおブレネリの謎」という論考を基にして、「蓋然論理は実は私だけでなく多くの人が日常普通に使っているものだ」と言うことを見たい。まず歌詞を掲載する。

- 1、おおブレネリ あなたのおうちはどこ
わたしのおうちはスイツランドよ
きれいな湖水のほとりなのよ
ヤッホ ホトゥララ(何回も繰り返す)
- 2、おおブレネリ あなたの仕事はなに
わたしの仕事は羊飼いよ
おおかみ出るのでこわいのよ
ヤッホ ホトゥララ(何回も繰り返す)

この歌詞について彼の挙げる主要な疑問点は以下の3点である：

- ①呼び捨てにできるほどの人がなぜその人の出身国を知らないのか、
- ②女の子が怖いオオカミが出るところでどうして羊飼いをやれるのか、
- ③ブレネリはどうして一言答えるたびに歌い踊るのか。

そして論考ではこれらの疑問点についていずれも常識に照らして、「普通はないよね」と言っている。つまり「論理的に不可能」と主張しているわけではないのでいずれも蓋然推論である。もちろんこの歌詞にあるような「非論理」は歌詞ならずとも文学や芸術一般の、情報よりも情景や情緒を伝達したい媒体によく見られることで、例えば著名なオペラの「ライオンキング」でも頻繁にみられることだ。今回の論考はそれをあえて研究対象として扱い、学術的手続きで分析したらどうなるかの検討を試みたものと言える。

著者は先ず、従来から主張されている3つの有力説である「旅行中説」「踊り子説」

「精神科受診説」を取り上げ、これらの説がいずれも説得力を持つものの常識つまり蓋然論に基づくとどうしても超えがたい欠陥があると指摘し、最終的に著者オリジナルの「スパイ説」を提示している。

まず旅行中説では、「家の所在を聞かれて国名で答える理由の説明としては明快であるが、旅行中ならば出会ったばかりであるのに呼び捨てはふつうあり得ない」と却下している。更に「もしナンパならありうるが、いきなり踊りだしたら気が萎えて断るのが普通だ」と結論付けている。ここでは「おおブレネリ」が「王ブレネリ」なる香港人だという仮説も検討している。

次に踊り子説では、「ストリップ劇場なら呼び捨てやシュールな会話もありうる」としながらも、「そういう行為は呼びかけ者が酔っていればあるいは可能だろうが、周りの客の輦蹙（ひんしゆく）を買って蹴りだされるだけだろう」と推論して却下している。

続いて精神科受診説では、「ブレネリが精神を病んでいてかかりつけの医者に診てもらっているという状況はありうるものの、精神病を持ち出せば夢物語と同じでどんな話もありにできてしまうので説として稚拙である」として退けている。

最後の自説のスパイ説では、「スイスが永世中立を貫くためには隠れた軍事であるスパイ活動は必要だった」という認識の下で、東側の陰謀で捕縛された女スパイのブレネリが、「自白剤を飲まされつつも内通者を守るために必死で気をそらそうとした」という論理付けとなっている。ただこの論理に本当に破たんがないのか、私は検討していない。

この論考の論調を一言で言うとな次のようになる。極めて順当な学術的手続きに従ってなされているのに、当初は純朴だった歌詞がいろいろいじられてどんどん本来から遠ざかっていき、最後にはとんでもない結論が導き出されてしまうと言うねじれ構造だ。つまりこの論考は、実際に読んでもらうと良く分かることだが、学問的手続きや論考形式に対する皮肉、嘲笑、パロディ、そしてブラックユーモアが目的であると考えられる。

更にここで指摘したいのは、この論考が論文でありながら、随所にストリップ劇場の話とかジェームズボンドの話とかが自然に入ってきていて、その意味ではシクラメンのかほりと対極に遊びや読者サービスがふんだんに盛り込まれていることだ。だが一方でスイス等世界の地理や歴史や政治等に関するうんちくも点呼盛りで、「こちらの論考の方がシクラメンよりよっぽど歌になる」との感覚を得た。

なお、通常の論文ならサマリーがあるところ、この論考を要約してしまうとこれらの遊びの部分がすべて脱落して、娯楽には最重要な笑えるところが蒸発してしまうことになる。これは、「現代は要約が必然だ」と言う立場に立つ私にとっては、重大な挑戦であった。

最後にこの歌詞の素朴な疑問に対する私なりの回答として、以下に「革命同志説」を挙げる。状況としては共産主義革命あるいはイスラム国を想定してもらえばよい。

おお、コードネーム「ブレネリ」同志、君の革命拠点はどこだったかな？

はいキーロフ同志、スイスであります。湖の近くに野営しております。

さあ革命の夜明けを祝して歌おう、ヤッホー・インターナショナル！

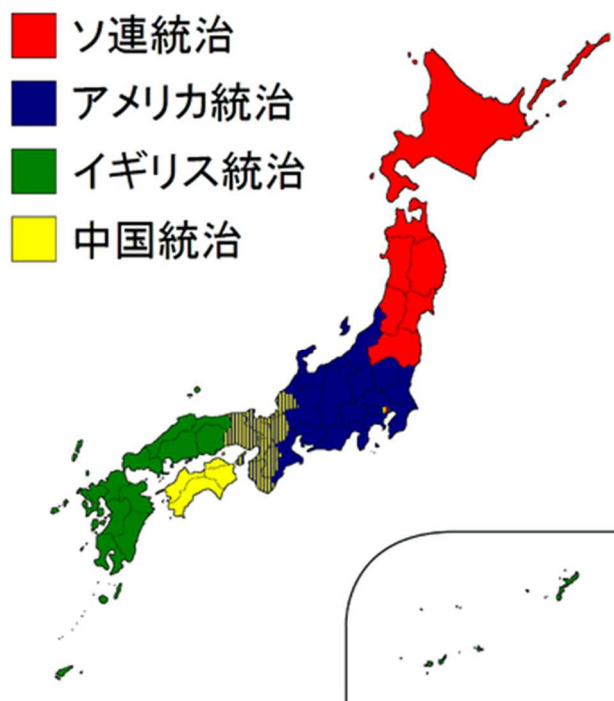
おおブレネリ同志、君の革命達成状況を述べたまえ。

はいキーロフ同志、15人ほどの細胞を率いております。反革命反動分子が遊撃してきますが、わが隊も善戦しております。

さあ革命の夜明けを祝して歌おう、ヤッホー・インターナショナル！

まあ、こういう感じですね。

16、日本4分割



先の大戦では、昭和天皇のご聖断によって日本はポツダム宣言を受け入れて無条件降伏し、その際の連合国側の力のバランスと思惑によって、日本は外地のほとんどを失ったものの内地は分割されずに現在に至っている。ところが、当時連合国側では日本の分割占領案も検討されており、ポツダム宣言を受諾しなかった場合にはこれが実行された可能性が高い。

分割の方法は、「北海道をソ連、本州を米国、九州を英国、四国を中国」と言う形を基本としながらも、実際は上の図のようにもっと複雑だったようである。本日は「歴史のもしも」として、もし日本が分割統治されていたら日本は今頃どうなっていたか、特に日本人の精神的バックボーンであり洗練されたアニミズムであり一神教に対抗できる最後の砦でもある神道が存続しえたのか否かを中心に、瞑想してみる。

この検討は、関連諸国の国民性や地政学を基に先入観なしに瞑想するのが最善であろうが、本日は実際に分割された国として朝鮮、ベトナム、ドイツ、そして中国・台湾を念頭に置きながら瞑想を進めることにする。これらの国はいずれも、「自由主義側 v s 共産主義側」と言う形で分割され、ベトナムは共産主義政権が、ドイツは自由主義政権が統一の回復を果たし、朝鮮と中国はいまだに分割されたままである。

このうち、ベトナムは民族統一や植民地からの独立と言う強い要因があり、日本とは異なっている。そういう意味で、共産主義を必要としなかったのに分割されてしまった例としてはドイツが日本に一番近いだろう。また、もし蒋介石政権が四国も持っていたとして、毛沢東の共産軍に追われた蔣が、果たして台湾に逃げたのかあるいは四国に逃げたのか、これは判断が難しいことだが、彼が財宝を持ち逃げしたかったことを思えばより渡りやすい台湾の可能性が高い。

いずれにしろ、先ず上図のように4分割されたとする。米国と英国は戦前のインドやインドシナ統治を見ても分かるように、有価物の収奪はしても宗教の押しつけはしなかった。私はプロテスタントをまともな宗教とはみなしていないが、これらプロテスタントの米国のオバマ大統領に見えるような、「ボーイスカウトの坊ちゃんの良い子」の正直な性格からして、日本から天皇制や神道を奪うような手間のかかることはおそくしなかっただろう。だから少なくとも日本の中心部において神道や天皇制は、武士道的要素を制限されながらも残った可能性が高い。

さらに戦後に米国が沖縄を返還したことからも見て取れるように、米英両国は日本を、もちろんそれなりに形を整えてだが、いずれ返還したであろう。とすれば日本の主要

部は30年位前に変換されて、今頃遅まきながら高度成長期にあったと予想される。ここで「それなりの形」とは、日本の戦前の神社神道が国家神道でもありこの精神が暴走して先の大戦に至ったとの認識から、神社の相対化とか、自由・平等・博愛精神のもっと徹底した再教育とか、キリスト教布教の強化等である。ただし彼らのモットーとして強制改宗までは要求しなかったと思われる。

他方、ソ連占領域の東北と北海道においては共産主義教育が強化され、神道は壊滅状態になったことだろう。特に北海道は開拓使が浅いために神社の数が少なかった。そして米ソ占領域の境界には東西の壁ならぬ南北の壁ができ、板門店のよう小競り合いすらあっただろう。しかし、シベリア抑留されて共産主義教育を飴と鞭で受け一時はその気になった元日本兵たちも、ダモイ(帰国)の船で舞鶴や佐世保に着いて日本の山河を見たときにそんな教育はすっかり忘れて祖国に感涙した例からも分かるように、ソ連支配下に置かれた日本人が本当に神道を忘れることはなかったと思われる。

ちなみにソ連の領域は偶然にもかつてのアイヌの元支配地と一致しているが、ソ連革命政府が地域文化を尊重したとは思えない。結局ソ連下の領域も東ドイツと同様に、ペレストロイカの波に乗ってゴルバチョフの人道策により解放されたのではないだろうか。この地域の人々も日本に戻れば神道は徐々に復古したであろう。

最後に四国、これが一番厄介かもしれない。蔣は優れた軍略家であったし、大陸を広く支配していた頃が忘れられないだろうから、今でも台湾・四国合同政府のようになっている、運が悪ければ沖縄も台湾四国連合の手に渡っていて、今も膠着緊張状態が続いていた可能性もある。

それにしてもこの図で良く分からないのは、なぜ九州が中国で四国が英国でなかったかということだ。その方が地勢的に治めやすかったであろうに。ただもし九州が中国の支配下であったなら、九州も毛沢東政権側に渡っていた可能性もある。もしそうであったら九州は永遠に帰ってこなかっただろう。もちろん沖縄も危ない。本気で日本は分断されていた。

なぜ日本が結果的に事実上米軍である進駐軍の、まとめて支配下にはいったのか、裏にはおそらく虚々実々の国際取引があったことだろう。全貌が明らかになることは永遠にないだろうが、今の視点から見ればまだ不幸中の幸いだったと思える。一種の神風なのかもしれない。しいて言えば米国のルーズベルト大統領が急死して政権がトルーマンに移ったことは大きな作用となっただろう。おそらくこのような偶然の多重の

重なりなのだ。

以上は神道を神社神道の側のみ見たが、日本にはいくつかの有力な教派神道もあった。これらはいずれも戦前は抑圧されていたが戦後はどう動いたか、これらの動きを予測するのはなお難しい。

17、夢と解釈(その3)

＜夢1＞私が普段から興味を持っている、日本古来の伝統文化に造詣の深い先生に来てもらって、色々教えてもらった。そして夜になったので全員寝た。次の日に起きてみると、先生もなぜか昨日帰宅せずに隣の部屋に泊っていて、しかも自分で布団を敷いている。不思議に思うと先生から「これは客をもてなす態度ではない」と、日本文化に基づいた説教をされた。とりあえず謝って皆で朝食を取ろうとするとまた先生から、「客を下座に置くと何事か」と、また日本文化的な説教をされた。そしてさすがにうんざりしたところで目が覚めた。

＜解釈1＞この夢の内容も、常識のない私があたかもやらかしそうな行為です。きっといつかこのようなことをやらかすだろうと、内心恐れているということでしょう。

＜夢2＞私は公衆浴場に入っていた。結構混んでいた。自分はカランの方に居たが、反対側に泳げるほど広い大浴槽がある。人も少ない。私は泳ぎたくなくてそちらの方に行こうとしたが、なぜか進めない。もがいているうちに子供を転ばせてしまって、その子の親や周りの他人に「この人でなし野郎」ととがめられた。こうして話がややこしくなって、大浴槽はますます遠のいていく。

＜解釈2＞この浴場は同じ物が今までに夢に何度か出てきていて、しかも何気に近所のスーパー銭湯に似ています。風呂が出てくるのは意識下でトイレに行きたいのでしょう。進みたいけどちっとも進めないのは、自分の足を引っ張る奴が必ずいると言う被害妄想の現れだと思います。

＜夢3＞韓国と北朝鮮の皇太子が抱き合って握手をしていた。メディアは「歴史的和解」と絶賛していた。しかし北の皇太子は皇帝(金正日)から、「バカ野郎、握手した後ろ手で相手を刺し殺すのだよ」と説教されていた。だが北の息子は如何にも気弱そうで、金正恩ではなくどうも満州国皇帝だった愛新覚羅溥儀に似ていた。同じ場面が何度もプレイバックされた。

＜解釈3＞北が「水爆実験に成功した」と発表した直後だったのでそれが印象に残っていたのと、最近満州国の動画を見たのでそれらが混じってできた夢だと思います。

＜夢4＞私は研究発表をしていた。どうも私の博士論文の審査会らしい。そこで私は自分の研究を一通り発表した後で、「実はこの手法はもう古い、これからは数値解析に係るデジタル数を一旦アナログ数に変換して解析し、その解析結果を再度デジタル数に変換し戻して最終解とする時代になる」と力説していた。

＜解釈4＞私の日々のライフワークの理念がそのままに反映された夢だと思います。

＜夢5＞どうしても女の子と付き合いたいという友人のために、私はひと肌脱いでいる。先ず女の子を調達し、空き家にベッドや仕切りを入れてセットを作り、そこに2人を押し込んで一丁上がり。これを5丁ばかり繰り返したが、なぜか自分は常に建物の外にいる。別の人に「お前は人のためにばかり骨を折ってバカだなあ」と問われるが、私は「嫁様の手前私はしません」と固辞している。

＜解釈5＞この夢もほとんど現実ですね。きっと嫁様が怖いのでしょう。あるいはお人好しの自分に愛想をつかしているのかもしれませんが。

＜夢6＞私は目的地に向かって必死に走っている。あるいは車か。そして勢い余って民家に飛び込み、風呂場を壊して怒られ迷惑料を取られた。なおも急ぐと、今度はラーメン屋台をひっくり返して、また迷惑料を取られた。そしてやっとたどり着いたら、そこは小料理屋だった。2階の座敷に通されてウイスキーを何杯も飲んで勘定を聞こうとすると、和服のおかみさんが説教や能書きばかり垂れてちっとも話が進まない。私は所持金で払えなかったらどうしようとハラハラしている。

＜解釈6＞物事はなかなか思い通りにいかない、あるいは世の中は因縁をつけられて金をむしられるばかりだと言う普通の嘆息が、夢になったのでしょう。

＜夢7＞私はなぜか侍だ。殿に仕えて近習をやっているが、この戦、敗戦は目の前だ。私は仲間の親衛隊と共に、殿が切腹する時間を稼いでいる。周りの仲間は次々と切られて痛そうにもがいている。あれ～、格好良く討ち死にではないのかよ。痛いのは嫌だなと思うが、もう逃げられない。背中から切られるのは痛そうなので破れかぶれで敵陣に突入するが、自分程度の腕前で人を切れるわけがない。ズブッ、ブシュッ、あれえ、死ぬ覚悟をする時間すらないのかよ、死んだ(涙)。

＜解釈7＞これも「死ぬ時はいきなりで自由も効かなければ猶予もない」と言う普通の予感が、夢になったものなのでしょう。

＜夢8＞私は仕事の用で弁護士を呼んだ。すると金物屋の店員のような下品でバカそうなおばさんがやってきて、「自分は弁護士だ」とバッジを見せる。尋ねて教えられたとおりにやったら全く間違っていた。そのおばさん弁護士が、同僚の上品で賢そうな女性を露骨にバカにしている。この件について瞑想したところ、「このおばさんはその

もう一人の女性の旦那の弱みに付け込んで替え玉受験をさせて自分は弁護士になり、しかもその後口封じのためにその旦那を殺した」と出た。私は証拠を握るために先の女性と探索を開始し、おばさん弁護士を呼び出しておびき寄せる。

<解釈8>この夢はおばさんや世の愚か者の図々しさに辟易としている、世の中のばかばかしい仕組みに対する私の気持ちが出ているようです。

18、良い教育とは

— 人は法則を見出せない程愚かではないが法則ですべてが解決すると思うほど世間知らずでもない。 —

これは、私が今までに人と世の中のありようを見てきて気づいた、おそらくはかなり究極の普遍法則です。法則の中に法則と言う語が入っているので自己引証にはなってはいませんが。人は有限個の幾例かを元にして、場合によっては1つの例からでも、法則を導き出せます。法則を見出すのが人の知恵の最上の使い方です。もちろんこれは蓋然法則なので常に当てはまるわけではないですが、それにしても法則によって事物の考察範囲が広がり、かつ根本に立ち返って考えられるようになります。

その、法則に気づき応用できる能力、それはアナログ力です。つまり似ているものをひとくりにでき、そのひとくりを別の似ているものに適用できる能力です。計算機や人工知能はアナログ力がないので、永遠に人にとって代わることはできないゾンビです。そして教育と言う重要な問題を考えるとき、実は教育課程に於いても暗に、このアナログ力が想定されていると言う指摘は重要です。なぜ教育を重要な問題だと言うか、それはもし現行の教育が単に教師に飯を食わすための無駄なことだったとしたら、教育は人の若い一番有能な時をつぶしている大罪以外の何物でもないからです。

さてその教育、今は「詰め込み教育」などと言われて評判が悪いです。これを改革しようとしたゆとり教育の実験は無残な結果に終わっていることから仕方ないようにも思えてしまいますが、今の教育は本当に最適なのでしょうか。まず教育は、限られた時間に教え込むので何でも教えるという訳にはいかなくて、数と量の制限の中で必然的に取捨選択されています。

その現状の取捨選択は、社会人として最低限の規範を守りかつ大人としての役割分担ができるための、そして何よりも自ら考えるための最大公約数を教えるとして設計してあるべきです。ただここで仮に、「生徒に類推適用すると言う能力が全くない」ならば、「どんな選択をしても無駄だ」という結論になってしまいます。類推能力はそれほ

どに重要です。

教育あるいは学習は生まれた時から始まっています。「転べば痛い」これも学習です。そして教育は促成学習です。教育は日常のことから始めるので、まずは挨拶をするとか、お金を数えるとか、字を読めるとか、分からないときには尋ねるとか、そういうことから始めます。しかし例えば飴玉の数を習った生徒がそのままの応用で100円玉を数えられないとしたら、教育はおよそあり得ません。いちいち全部をルールとして注入しなければならず、およそかばいきれない。取捨選択などありえないのです。教育とは物事全てこういうことで、より基礎的でかつ類推範囲の広い事柄、つまり天才でなくても1を聞けば5くらいは気づくようなことから教えるべきです。最大効用だからです。この有機的な関係がすなわちアナログ脳です。

ところが現実には詰め込み教育になっている。つまり1を聞いてどれだけ気づいたかよりも表面的な知識の数の方が重要視されている。これには大学入試が知識の数しか問えないと言うマスプロ教育の限界があるのですが、でも大学ばかりを悪者にするとはできません。なぜなら社会が大学に期待しているのは人格形成でも天才育成でもなくて、凡庸な職業人つまり社畜候補を養成してくれれば良いのです。そして社畜だったらマスプロで教育できるので集団講義と言う形になじむわけです。

それにしても不思議なのは、こうして歪んだ詰め込み教育で知識の数で選別されたのにもかかわらず、なぜか選別された人間は実力がある。もちろん傾向的蓋然的にですが総合的理解力と実践力があって、1を聞いて10を知ることができるという点です。そういう選別方法をしていないのになぜかなっている、これは不思議です。アナログ力を直接には図っていないのになぜか大筋アナログ力で並んでいるわけです。

この答えはおそらく、入試問題が一応できる限りひねってあって、四角い頭を丸くしないと解けないようになっているということでしょう。つまり数学や物理のような発見科目に限らず、地理や歴史や英語のような暗記科目でも、脈絡全体の読解ができないと単発の点知識では解けないようになっているわけです。限界はあるけれどもアナログ力を一応試してはいるようです。いわゆる有名大学ほどその傾向が強い。そこで大学による選別が、平面的な記憶の数の勝負という弊害をはらみつつもある程度アナログ脳も試していて、「他により適切な基準がないから仕方ないよね」と使われているわけです。

それにしても、いわゆるエリート学生たちの頭が「平家物語＝諸行無常」とか「クラシック＝バッハ～ベートーベン」と言うように、中身に関係なく表面上の点知識のネットだ

けでつながっていて鼻が白むのは、やはり詰め込み教育の弊害でしょう。それにもし当の学生が、「世の中が詰め込みの秀才を期待しているのは有能な社畜と言う単なる奴隷が欲しいから」に気づけば、普通は自分の今までがばかばかしくなるのではないのでしょうか。

あるとき著名な成功した起業家が、大学に講演に呼ばれました。そして講演では「君たち、せつかくの有能な若い時を何でこんなところで無駄に垂れ流しているのだ、早く辞めて起業しなさい」とはっぱをかけたそうです。これはその通りで、大学で死んだ学問を聴講しているより起業と言う生きたテーマを専攻する方が、よっぽど地アタマを鍛えられるでしょう。大学は、昔は別として今の大学は会社と同じで、まだ人生の目標やライフワークが定まっていない人や一生を安楽に過ごしたい人の、一時的な退避場です。

大学全般が職業訓練校化する中で、あるいは居直りでしょうか、リベラルアーツ教育を看板に生徒を集めようとする大学もあります。リベラルアーツとはアカデミーの本来である、「目の前の些細なことにとらわれず考える力を広く養う」ことを目的にしています。これは理屈の上では正しいことです。リベラルアーツは社畜でなく貴族を養成するものだからです。ただ現実にはどこも考える力など養成できていない。本当に養成したいなら講義形式でなくディベート形式にして、「創業と守成とどちらが難しいか」と言ったテーマで議論すべきです。

最後に、仮にもっと改良された生きた教育をしたとしても、養えるのは秀才までで天才は養えません。天才は既成の何らの枠組みにも適合しないので、結局は自分で自らを鍛えるしかないので。実際にダヴィンチ、シェークスピア、アインシュタイン、エジソン、どの天才も正規の教育を受けていません。正規の教育はたとえ改良されたものでも、天才は潰します。実は多くの人を持っている天才気質の部分、それはイチロー程でなくても村一番くらいで十分だと思いますが、その部分を伸ばそうと思ったら自らどん欲に学んでください。そうした人はもはや、「平家物語＝諸行無常」の薄っぺらではなくなっています。

19、東洋的イデオロギー

一般に、西洋は人工的イデオロギーが支配し、東洋は自然と一体化する感性が支配している。欧米はその気質に合った一神教がその人工性をますます固くし、東洋では融通無碍な多神教が心をますます深くしている。西洋のイデオロギーとは、「万物は

人に支配されるためにある」とか「神に近づく方法は学習である」と言ったきわめて幼稚なものであり、しかも異端審問がうるさいのでかたくなにこれを守らないと命がない。

それに対して四季自然に恵まれて稲作が中心の東洋では、その自然や環境に寄り添い四季の移り変わりに合わせて生きる、アニミズム的な無為自然こそが最高の境地だと悟っている。この悟りのあるなしは大きな違いである。かつて米国のブッシュ大統領は、「祈ったらフセインは大量破壊兵器を持っていると出た」などと言う頓珍漢で、十字軍を始めた。悟りや精神修養の無い宗教で祈っても訓練皆無のニセ医者と同じで、単にでたらめの思い付きを正当化するだけだ。

このように西洋のイデオロギーとは万事が見え透くほどに幼稚であり、その最たるものが共産主義なのだが、では自然に即した東洋にイデオロギーはないかと言うと、残念だがそうではない。例えば陰陽道、陰極まれば陽となり陽極まれば陰となる、これは極めて深い自然観察の結晶なのだが、使い方によっては決めつけのイデオロギーになってしまう。また儒教の特に秩序構造、孔子は人の集団を注意深く観察してそこに秩序の美を見出したのだが、孔子以降の儒教はかたくなな年功序列になってしまった、典型的なイデオロギーである。

更には四神五行思想や日本の大和魂や武士道も、その発生は極めて深い気づきと高い魂の高揚であるのだが、だから西洋のイデオロギーのように幼稚で見え透いてはいないのだが、しかししばしばイデオロギー化するリスクがあることは歴史が証明している。

例えば明治維新と天皇制、これはネット右翼が理想郷として掲げ感涙して希求するものであるが、決してネット右翼の言うような、古代の記紀神話に直接に遡るようなものではない。もちろんつながりはあるのだが、万世一系が強調されたのは明治維新以降で、その目的も富国強兵であった。

ただ、ここが日本人の優れたところなのだが、日本が開国するにあたって欧米帝国主義の直輸入では限界があることにすぐに気づいて、日本人の古来の精神構造を生かす形で専制を敷こうと工夫したのが、万世一系たる天皇制の起源なのである。だからそこには、記紀神話ももののあわれも武士道もおもてなしもすべて包含された、そういう心にしみる仕組みを持った専制形態であった。そしてこの精神で開国からわずか30年後には日清日露の大戦に勝利を収めている。

さて、この武士道の心を温存した専制形態だが、日本人のメンタリティをうまく包み込

んだ大成功であったことは今述べたとおりだが、それは別の面から見れば、日本人が希求して止まない精神主義を認めると言う「譲歩」や「妥協」でもあったと言うことだ。だから、明治維新以降大東亜戦争終結に至るまでの日本は、結果として民意が通っていて意外なほど民主的であった。

行き過ぎた武士道と言う精神主義は、日清戦争後の三国干渉に自国の国力も考えずに憤慨し暴動を起こした。日露戦争のポーツマス条約では、賠償金が取れなかったことに自国の戦費が底をついているにもかかわらず憤慨した民衆が、全権の小村寿太郎の家に投石するほどの騒ぎになった。日本海海戦の陰の立役者だった上村彦之丞中将がそれ以前にロシア艦隊の捕捉に失敗した際にも、民衆は彼を「露探提督」（ロシアのスパイ）呼ばわりして投石した。

この過ぎた武士道は昭和になってますます先鋭化し、五一五事件や二二六事件と言う反乱を許す土壌となり、犬養毅や浜口雄幸の暗殺を容認し、満州国設立や関東軍の暴走による日中戦争の拡大を止めることができなかった。皇道派にしてみれば、単に民衆の声が上がるのを待ちさえすれば良かったのだ。実録によると、昭和天皇はことあるたびに軍部の暴走を抑えようとしたと言う。ここに真の帝王教育の成果を見る。だが立憲君主制の制限の内では、天皇すらも暴走する民意を抑えることができなかった。そして無謀な英米開戦と敗戦が必然的にもたらされる。

私がネット右翼に危うさを感じるのは、彼らにおいては武士道がイデオロギー化し硬直化して思考停止状態に落ちいつているからだ。これでは過度の精神主義で合理的発想の無い、戦前のしくじった日本人と何ら変わらない。もちろん日本人の武士道精神は尊いがそれは自然と共存する柔軟思考に於いてであって、イデオロギー的先鋭化においてではない。もし日本人が先の大戦から何も学ばないとしたら、それは武士道が実は共産主義ほど価値が低いことを意味してしまうのだ。

先日「相対の中の絶対」と題する記事をアップした時に私は、「自由平等博愛はキリスト教とは無関係な人類普遍の原理であって、あらゆる思想信条は自己の伝説を墨守する前に、この絶対的価値を持つ合理精神を尊重するように進化する義務がある」と書いた。その際はIS国を生んだイスラムを例にしたが、これは日本の武士道にとっても無関係ではない。

戦後に一時左翼反動したものの最近の原点回帰、これは喜ばしいと思っている。だがもしこれが単なる戦前への郷愁と復古であるならば、日本人は再び世界情勢音痴、合理主義音痴の愚を繰り返すだけであろう。自分が期待したほどでなかったと言う理

由で、武士道に名を借りて今度は安倍首相に投石するかもしれないのだ。今がちょうど良い時なので、武士道をぜひ自由平等博愛と習合させて、尊厳と素心により一段高い武士道へと進化してほしいと思う。

20、久しぶりの街歩き

本日は先日に得たいいくつかの気づきを、論文調でなく日記調で書いてみます。調子を変えるのも一種の発想の転換で、新たな気づきのきっかけになりえます。

先日私は電車で文京区目白台地区に行きました。主たる目的は講談社野間記念館と言う美術館の、「近代日本の花鳥画」と言う展示を見るためでした。①近代日本画、②花鳥画、これらのいずれにも興味がありました。この記念館は、熊本細川家の美術品を展示する永青文庫の近くにあってこちらは10年ほど前に数回行ったことがあるのですが、野間記念館の方は初めてです。

10年前には、副都心線がまだ開通していなかったので目白駅から歩き、20分もかかりました。今回は副都心線の雑司が谷の駅からなのですが、それでも15分程度の歩きです。歩いてみて気づいたのですが、私は10年前も歩いたはずの目白通り沿いの商店街をまるで覚えていませんでした。当時は街歩きの趣味を始めるよりも前だったので、目的地にしか興味はなかったのでしょう。でも今回は街並み、と言っても雑多な知識ですが、これがしっかりと印象に残りました。もう街歩きの趣味はしていないのですが、「辞めたら無駄だった」と言うことは決してなくて、そこで培った視点や経験は残るのだと言うことを実感しました。

さて、野間記念館の花鳥画ですが、講談社の初代が文人で当時交流のあった芸術家や文化人に依頼した作品が多数残されていて、それらから展示しているとのことでした。今でも著名な、菱田春草とか横山大観とか速水御舟とか上村松園とか、そう言った人々の作品が並んでいました。

ところで私は山水画について、以前から素朴な疑問がありました。山水画は自然を描くものであるところ、しばしば家や橋や舟と言った人工物が出てきます。「人工物は自然とは違うのになぜだろうか」と言うのが素朴な疑問です。実はこの疑問が最近解けたのですが、そのきっかけはある人のブログでした。そこは写真ブログで、地元の四季の移ろいを高性能のカメラで良いアングルで映していて訪問客も多いのですが、私にはなぜか物足りない。

その足りない感じは何だろうと考えた結果、それが人の気配だったことに気づいたのです。人の気配のない景色はぬくもりがない。そして家や橋や舟は人の気配であって、これが効果的なわけです。そして花鳥画でも、ちょっと鳥がいるだけでその絵が生きてくるのを実感しました。

さて記念館を出た後は、記念館の隣にある関口芭蕉庵に寄りました。やはり初訪問です。この庭園は神田川に面していて、かつてこの川の護岸の改修工事に俳聖の芭蕉が2年ほど関係したと言うことです。庵（いおり）と庭園があって俳句同好の人々の聖地になっています。私がこの10年でやった主な趣味は街歩きと俳句だったので、ここにも寄ることとしました。そして芭蕉の供養塔まで来ると、おばさまたち数人の団体が先に来ているので自発的に説明などしてくれました。

そして私に「ここに来られるのはやはり俳句をなさるのですか」と聞くので、「ちょっとやっていたんですが筋がないのでやめました、俳句と言うより季語入り報告文でしたね」などと答えると、「私たちは今から近くで句会をやるのでご一緒しませんか」などと誘ってきます。一般に「短歌は貴族の物で俳句は庶民の物」と言われますが、その俳句のおばさまたちもなかなか上品です。特に季節の移り変わりに優雅な目を持っておられました。結構なお話だとは思いましたが、その日は予定があったので丁重にお断りしました。

私は続いて神田川沿いを目白方面に歩いて、新江戸川公園に入りました。能書きによると、この辺はかつて肥後細川家の下屋敷があったところで、この公園も細川家の回遊式庭園だったとのこと。たしかに神田川沿いの斜面の武蔵野の面影が残る雑木林の中に、枯山水的な趣の池と回遊が配されていて、その回遊を登っていくと永青文庫にも至れるようになっています。

そこで分ったのですが、この庭園も文庫も、そして文庫のもっと目白通り沿いにある和敬塾（熊本県学生寮）もみな熊本関係です。つまりこの辺がまとめて全部、有力大名だった細川家につながりのある施設からなっているわけです。この成り立ち方は旧江戸八百八町ではよくある現象です。実はこのことも街歩きで知った法則なのですが、今回も再認識しました。

さて私は最近、「美術館博物館＋学生食堂役所食堂」のセットで見聞を広めるのが趣味になっています。そしてこの立地だと実は早稲田大学に出るのがよほど近いのですが、早稲田大学はこれだけで見どころがたくさんあるので別途として、この日は学習院大学に向かいました。ここは6年ほど前に娘を連れてオープンキャンパスに来た

ことがあるほかに、それ以前にも当時理学部長だった江沢洋先生が夏のセミナーと称して数理科学の講座を開いていたので、よく来たところです。

その広いキャンパスはかつて、乃木希典院長の宿舎跡も含めて一巡してあるのですが、ここでも街歩きの素養が役に立ちまして、今回の方が敷地の構造をよほど立体的に見ることができました。敷地内の梅のつぼみはもう膨らみ始めていて思わず一句ひねりたくなりました。まあ趣味と言うものは辞めた後も残る、その意味ではたとえ現代の数値効率主義に照らしても決して無駄ではないですね。

学窓に 薄青き空 梅蕾(つぼみ) お粗末です

この10年間の趣味と言え、街歩きや俳句ほどではないですが陶芸や料理もちょっとかじりました。そのおかげで、昼飯にちょっと食堂に入っても用いられている器や料理の隠し味などに、つい目が行くようになりました。この料理はどのように作るのだろうと素朴に考えたりします。さらには若いころはその意図すら読めなかった文学物や随筆物等の書き物についても、その心の襞が実感できるようになりました。その効果はその物だけでなく類似物にも至るわけです。

大学生のころは理系だったので、「一般教養なんかやめて早く専門を教えろよ」とか思っていたのですが、それなりに人生を重ねて至る所はやはり総合的文化力だと思っています。まあ、強制で点数が記録に残るようなやり方で教えられているうちは好きなものも好きになれませんが。目が開けてみると世の中は面白いものに満ちていてより取り見取り、選択に困るほどだと言うのが今の実感です。

21、宗教とは何か

宗教とは何か。宗教を定義する、これはおそらく一生かかってもできない仕事であろう。法的には最高裁判所の判例により、「超自然的、超人間的本質の存在を確信し、畏敬崇拝する信条と行為」となっている。大まかにはこうであろうが、実際はそう簡単でない。UFOがあると信じて柏手を打てばそれは宗教だろうか、あるいは超能力により犯人を突き止めそれを信じれば宗教だろうか。

私には素朴な疑問がある。第一に、「共産主義は科学である」と主張しているが私にはあれはどう見ても宗教なのだ。反論する人は言うだろう、「では共産主義の神様の名前を言ってください」。答えはない。第二に私は、神社神道が空気のようなものであって宗教とは思えない。だが靖国神社への公人の参拝は宗教行為に当たるとされている。これらはどう整然と区切れるのだろうか。

まず神道ならばすべて空気かと言うと、これは違う。神道は大きく分けて神社神道と教派神道がある。教派神道とは金光教、天理教、大本教と言ったものだ。これらは私から見ても宗教だ。ではどこに違いがあるのか。思うにこれら教派神道には近世に教祖が居てその教祖らは独自の預言をしていて、それらの団体の間ではその教祖の言葉が最上位に置かれている。だが神社神道はそのような教祖が居ない。つまり誤解を恐れずに言えば、変なおじさんやおばさんが居て変わったことを言っているか居ないか、この点が実は宗教か否かを分ける極めて重要なポイントであるように思う。

この観点に立てばイスラム教はムハンマドの存在によって、キリスト教は使徒パウロの存在によってバリバリに宗教である。これは私の感性とも合う。特にイスラム教のでき方と、日本の教派神道や創価学会等新興宗教の出来方は驚くほど似ている。まず神がかりの教祖が奇跡の癒しなどして周辺の人心を掌握した後に、代替わりした二代目の聡明な番頭が、奇跡の力はないが経営手腕によって教義を整理して伝道に励むと言ったシナリオである。方や世界宗教でもう片方は国内の特殊宗教なのだが、この広さは本質ではない。

この観点に立てば、つまり宗教であるか否かは第一義的に教祖とお言葉の在不在かと言う立場に立てば、共産主義だってマルクスとレーニンと言う開祖が居て「聖典」があるのだから、立派に宗教ではないか。と言うと反論があるだろう、「労働者による生産手段の独占は歴史科学の必然である。つまり信じなくても支配されるのだから科学であって宗教ではない」。それはそうであろうが、だとすれば彼らが嫌悪する「生産手段の少数資本家による寡占化」だって歴史的必然であって、信じなくても世の中はこうなるのだ。つまり、「信じなくても支配されるから直ちに科学であり科学であれば必然的に宗教でない」と言う論法は、物の一面しかとらえていない。

たしかに科学の成果は信じなくてもその人を支配していて、例えば重力を信じなくてもその人は穴に落ちるのだが、しかし科学もそれ固有の手続きがあるのであるし、ましてや「科学がすべての事象の真偽を判定できる」と思うのなら、それ自体には証明がないから信仰、つまり「科学教」と言うことになる。そもそも科学は無謬だというのは原発が爆発するわけがないので、これも信仰だ。考古学や水文学や分類学などは最近の分析技術の進歩によって、かつての科学はもはや科学ではない。

一般に仏教は宗教であり、特に現代的切り口において宗教であることに異論はないが、私は仏教の開祖である仏陀をむしろ、素晴らしい知性と洞察力の持ち主であるという意味で尊敬している。具体的には四諦とか八正道とか、人を苦しみや悲しみと言

った心の問題から解放する具体的かつ普遍的な手段を、この上なく理性的に集約しているからだ。この客観的態度は科学者のそれに匹敵する。

もし仏陀が今の時代に生まれていたら相当著名な科学者になっていて、あるいはノーベル賞も取れたかもしれない。つまり彼の教えは信じない人にも適用されて、だから精神科学であって宗教でもないとも言えるのだ。つまり宗教にはどこでも、こういう普遍的な面も併存しているのだ。ムハンマドの説く慈悲と寛容の精神は私にも自動的に適用されることを知っているが、でも私はイスラム教徒ではない。

さて元に戻って、共産主義に神は居ない、少なくとも見えていない。だが世界最終革命とか路線闘争とか聖典の解釈論とか、あるいはカンパと言う献金と兵士と言う信徒のこき使いとか、トロツキストと言うレッテル張りと処刑とか、そのあらゆる態様に於いてこの「主義」は限りなく一神教だ。キリスト教マルクス派だ。

つまり宗教であるか否かは第一義的に神の存在か不在かではなくて、「変わったおじさんの変わったお言葉」があるかないか、そしてそのお言葉を、そこに根拠などあっても取って付けたようなものだが、理性としてではなく感情として信じるか否かの一点なのだ。超自然を信じるのは感情だからもちろん宗教だが、超自然でなくても最終的な人の決断は信じるか否かだから、空気のように自然なもの以外は、信じればすべて宗教なのだ。

ところで何代も続くキリスト教の家庭に育った、生まれながらの善男善女たちにとっては、あるいはキリスト教も空気のように自然なものであってことさらに選択して信じるようなものではないかもしれない。イスラムだって同様だ。彼らにはもう「変なおじさん」は遠い昔の忘れられた存在になっている。とするならば神道も私にとっては空気になっているだけで外人にとっては宗教なのか。これは違うだろう。神道の大本は人工的な製作物でない記紀神話である。

もちろん神道にだって宗教になる危うさはある。例えば国学の祖の一人である平田篤胤は、「記紀の神々が世界を創成し他の宗教の神に真理を教えた」などとトンデモな論述をし、これが水戸学と共に尊王攘夷の根拠となっていた。非現実的だが当時の大衆の多くが信じた。ここまで行くと平田学は学問ではなくもはや平田教である。そして今のネット右翼は多かれ少なかれこの流れを汲んでいる。満州国設立の立役者だった石原莞爾の国柱会も似た立場にあった。ここまで狂気だともう宗教である。

結局宗教と妄信は紙一重である。健全な精神とは他人を騙さずかつ自分も騙さないで、なおかつ心からあふれ出る感情のほとばしりであり、これらが健全な武士道であり大和魂であろう。この域まで行けばその人のその信じ方は宗教を超越している。つまり宗教に思考停止はつきものであるところ、思考停止していなければそれは宗教以上と言える。

22、「青い空」について

以前に、アナログ集合の幾何について瞑想したときに、「青い」は色の中で適当な位置を占め、「空」も空間や風景の中で適当な位置を占めるだろうが、これらを組み合わせた「空は青い」は、極めて日常的に使うもののこれが脳空間のどのような位置を占めるのかを問題にした。特に、「空」及び「青い」とどういう遠近関係にあるか、もしこれらの近くだとするとおおよそ異なる「空」と「青い」が近いということになってしまうではないかという矛盾を指摘した。

これについてしばらく瞑想したがその答えとしては、数学にも幾何だけでなく代数や解析があるように、アナログ集合の演算も幾何だけでなく、構造とかネットワークといった別の視点も必要であるということに至った。

ここでアナログ集合の基礎を復習してみよう。従来の点集合が「連続体は無限個の点の集まりである」と連続体を点に還元しているのに対して、アナログ集合では連続体それ自体を、「神秘を含んだ基本的な本質」としてとらえるものの見方である。従って事物の本質は還元論のように下からの積み上げでなく構成論的な上(神)からの分解、それも有機結合し相互作用しているものをあえてほどいての下向きの演算としてとらえるべきだということだった。

その結果連続体に特徴的な性格として、①境界があいまい、②多面的な性格、③集合同士の相互作用の存在、の3つを指摘した。いずれも点集合論ではありえない性格である。特に相互作用については、この性格のゆえに事物の観察には全体観が必要である。現行ではデファクトになっている科学の、「根拠づけと単位からの積み上げ」的手続きを強制適用すると、一番肝心の全体的本質が脱落してしまうことは、つまりスカスカの抜け殻しか残らないことは明らかである。

言い方を変えれば、「ミクロの単純和が決してマクロではない」という一般的で健全な性格の指摘になる。相互作用の基礎は、「似ているものを同じとして総括できる類推力や応用力」であり、この力の有無と多様性で人の能力が決まる。ここで重要なのは、

「同じものを同じと括る」だったら機械にでもできるところ、人の本質は「似ているものを同じに括る」と言うアナログ的気づきにあるという点である。

その例として挙げたのは第一に国民性で、国民一人一人と全体としての国民性はまるで違うことである。もっと身近で少数でも、クラス全体の雰囲気と生徒一人一人はかなり違う。更にもっと極端には、夫婦一体と夫妻単独はまるで異なる点であった。第二の例としてはミクロ経済学とマクロ経済学を取り上げた。前者は選好曲線に代表されるが、後者は決してそれらの単純和でなくて、株式相場といった気や心理の問題であることを指摘した。

これらの例ではいずれもマクロはミクロの単純和でなくて、その理由は構成要員同士の相互作用のほうが個々の構成員たちの性格よりも影響が大だからであった。ただこれらの例はいずれも、構成員が人という意味では同質であった。だがアナログ集合の相互作用は、構成要素が同質の場合のみとは限らない。その例として弾性体を挙げる。一般に、弾性体={ゴム、ばね、スポンジ}と書かれる。これは点集合論の書き方で、「弾性体はゴムとばねとスポンジの3つを要素とする集合であり上位概念である」と読む。

しかしアナログ集合論では、弾性体はゴムとばねとスポンジに代表されるような、柔軟でかつ復元力のあるものすべての包括概念であると考ええる。だから新たに「ゴムのばね」ができて直ちに弾性体であり、あるいは人の肌や心の働きすら弾性体とみることができるが、これらの「新参要素」が出現しても、点集合論では全く別の集合になるがアナログ集合論では依然として同様の包括概念である。このようにアナログ集合は柔軟でかつ振動している。

以上の観点から冒頭の「青い空」を見てみよう。どうして「青い空=青い+空」なのだというのが冒頭の問いであった。この答えを言おう。この質問には、まず「青い」と「空」があってその単純和として「青い空」が従うという無言の前提がある。ところがこの前提は点集合論の哲学からは是とされるものの、アナログ集合論からは逆である。すなわちまず「青い空」というまとまった実体験あるいは脳空間内の素朴な心象があって、その心象を何とか他人に伝えようとするときにその心象の代表的な複数の性質、従来の言い方で言えば強いタグを採用して、情報が脱落するリスクを承知で「青い+空」と分解して分析的に表現しているのである。

実際に、「青い空」には「さわやか」とか「晴れの日」とか「昼間」とか「運動日和」等々の多くの多面的な特性つまりタグが付随しているが、これらをすべてでは表現できない

のであえて捨てて、極めて情報を減らして「青い＋空」と分解して伝達用品にしているわけだ。だから「なぜ青いと空がくっつくか」は疑問として初めから間違っている上に、相互作用という重要な因子を全く見失っている。

だから「青い空」を伝達された他人は、まず「青い」と「空」を一瞬認識するではあろうが、むしろより強固なひと塊としてそれまでの人生から心象に強く刻まれている「青い空」を直ちに想起して、もちろん想起される心象は個人によって多少の揺らぎはあるであろうが通例ほぼ同等であって、同時に「さわやか」や「運動日和」も人通常の能力として多面的に連想できて、意思疎通としては十分にできたことになる。

ではこの理解の上に立って、「青い空」と「青い」及び「空」との相対的位置関係がどうなっているのか考えてみよう。脳の構造は基本的に非次元のネットワークであるから、そして神経を伝達するのは光速の電気であるから、ネットワーク上のあるところから発火して遠いところで着火するのは何ら無理がない。また、「紫の空」と伝達されたときは対応する単一概念がないので一旦「紫」と「空」に分解してみるが、「これらが同時に着火することはなかった」という理由から、そういう事象は認識できないしありえないという返答となる。

最後に、このような異種のものが相互作用して新たな新概念として定着する例は我々の身の回りにたくさんある。例えば「いやらしい」は「嫌だ＋そのようらしい」ではなくて「卑猥だ」という意味に転化する。「切り結ぶ」も「切る＋結ぶ」ではなくて「刀を交える」という意味に転化している。「犬死に」とは犬が死ぬことではなくみじめに死ぬことである。英語でも“give up”は「あきらめる」であって「あげる」という意味はなく、“takeoff”は「離陸する」であって「取る」という意味は失われている。いずれも高度の相互作用の結果である。

こう言う応用力がもし人になかったら、意思疎通には無限個の言葉が必要になって現実的でないし、いちいち分解して基礎に帰って考えていては危機の時に瞬発力が出なくて命が危ないし、分解によって落ちた情報を復旧できなくて永遠に目標にたどり着けない。この「相互作用としての総体」が特に強く出るのが技能とかノーハウといわれる分野で、しばしばマニュアルより勝っている。

23、意識の発生と推移

人は日々膨大な数の判断と選択をして生きている。その結果ほぼ安全で、かつほぼ希望がかなって生きながらえている。それら判断と選択の基礎となるものは不十分な

情報と、意識だ。意識とは脳において何らかの気づきがあるということだ。脳のどこか部位あるいはその連合において、「ビットが立った」みたいな励起状態が起こることだろう。

その意識は、極めてあいまいな場合もあればほとんど論理的な場合もあるが、いずれにしても①気づきとしてはひとまとまりである、②そのひとまとまりの気づきが多様な面を持っている、という特徴がある。こういう気づきをそもそも人はなぜ持てるのであろうか。基本的には意識の材料は、目や耳や鼻や感触等の刺激による諸信号であって、しかもそれらは第一義的に自己安全や自己保存のためにある。生まれたばかりのころ人は本能しかないが、それでも痛い、熱い、嬉しい、危ないといった素朴な感覚は意識として持っている。

それが、経験が増えるごとに次第に厳密になり細分化されていって、「転ぶと痛い」、「ミルクは熱い」、「食べるとうれしい」、「虫は危ない」等に進化していく。ではそもそも最初の「痛い～危ない」は、それぞれ脳空間内でどう位置付けられているのであろうか。これらはおそらく脳の非次元空間内でバラバラに存在しているであろう。これらがバラバラではあるが位置付けられているとして、それがさらに「転ぶと痛い～虫は危ない」に進化したときに、それらの進化形は脳内でどう位置付けられるのか。

思うに、痛い経験を何回もしているうちに同様の体験が原因になっているという法則性に気付く。そしてその法則の起とは「転ぶ」という共通原因だと気づく。もちろん転ぶ方は千差万別であるが。そこで脳内に、「転ぶと痛い」と言う蓋然論理が形成されるのだ。こういう経験が積み重なって人の脳内はより細かくなり、徐々に大人として対応できるようになっていく。ではその蓋然論理の「転ぶと痛い」は、きっかけとなった「痛い」の近くに脳内設定されるのだろうか。近いと言えば近い。だとしたらその論理は「転ぶ」にも近いはずだ。だとすると「転ぶ」と「痛い」は近いのだろうか。

我々が今住んでいる3次元空間では、近い同士は当然に近所になる。次郎さんと三郎さんがともに太郎さんの隣家だったら、次郎さんと三郎さんは近所だ。この道理はたとえ我々の住む世界が100次元であろうと線形空間であるかぎり変わらない。ところが非次元である脳内空間においては、この道理が成り立たないことに留意すべきである。同じものに近い同士でも、その近い理由が違えば全く遠いのだ。だから「転ぶ」と「痛い」は全く遠い。つまり、非次元空間に幾何としての距離や位相が入るとしても、こういう特殊なものになる。

さてその意識であるが、何らかのきっかけで発生するとその周囲に新たな意識をしば

しば再生成する。それは自発的にかもしれないし促されてかもしれない。その再生成の機構は強いて言葉にすれば連想とか類推といった感じだろう。梅干を見るとその心象が脳の適切な位置に保存されるが、同時に経験に基づいて「酸っぱい」という意識も自動生成される。

「そばとうどんとどちらが好きか」と聞かれると、この質問が反芻の後にまずひとまとまりで脳の適切な位置に設定されたうえで、その意味するところを脳的作用によってほどこき、かつ質問されているという気付きから、促されて答えの方向に類推を進め、先の質問のその先に答えのひとまとまりを脳内設定する、こういう順序だろう。大切なのは一旦1つにまとまることだ。

その間脳内では自主的にあるいは促されて、たぶんは無意識にいろいろなチャンネルの構成が試みられ組み替えられ、その中で適切なものが選択されていく。こうして他人とのコミュニケーションや自問自答、さらには夢も形成されていくわけだ。ここでコミュニケーションつまり言葉等によるやり取りは極めて皮相であって、その本質は言葉にならないほど繊細な、心象から心象への意識推移であることに注目してほしい。

例えばピカソの絵を見たときに、まず「これは一体何だ」と思うだろう。この時点ではその心象は脳内にまだ適切な位置を与えられてはいない。しかし不安解消のために人は何とか位置づけようともがく。その結果分かったころの連想として、「人がいるようだ」とか「その人はことさらに不完全だ」とか「展開図をことさらに並べているようだ」等々、本当は言葉にならないのだが心象レベルで徐々に位置付けていき、最終的には「芸術なのだからこういう世界もあり得るだろう」としてピカソに適切な座席を与えて納得する。

アナログ集合と蓋然推論の可能性に気付いて10年、その一つの方向が脳内意識作用の現象論的な説明にあると最近気づいてきた。そしてその総論と言うか終始のプロセスに今日到達したということか。もちろんこれはあくまでも瞑想であって科学ではない。だが「サルの脳に電極をはめ込んで活性部位を測定する」といった科学的分析的な方法が有効だとは、私は思っていない。

それは丁度楕円型で、部分で解決することはなくそれらの高度な相互作用の問題なのだが、そうかと言って「脳全体だ」と言うと、それ自体は正しいものの実は何も言っていないと同じで、ほとんど何の情報も含まれていない。そもそも先の意識の推移と連想の過程において、どれだけ非凡でかつ端的に濃縮した情報や表現や気づきに至れるか、これがその人の地アタマの良さであり、本来は人の採用はこの地アタマの良

さで直接図られるべきなのだ。そして教育も、こういう能力を高めるやり方が最高なのだ。間違っても断片的な知識の数ではない、つまりデジタルではない。

例えば明治維新前夜の百家争鳴の中で、「玉（ぎょく、天皇）を取った方が勝ちだ」と見抜いたのは相当に知恵があり、情報の粒度が高い。惑星の軌道に関して円軌道が常識だったところ、「楕円軌道であれば全てすっきりする」と気づいたコペルニクスの知恵の粒度も高いのだ。そして映画「栄光への脱出」で、逃げてきた青年の目を見て「お前は全部を語っていない」と断言したラビは、さすがに宗教者だけあって気づきの粒度が高いのだ。

アイヌ語を知るためには「何」に当たる語を知るのが重要だと気付き、そのためにわざとぐじゃぐじゃの線を描いて見せた金田一京助先生の知恵も粒度が高い。戦時中に紛れ込んだ外人に下手な英語で話しかけるよりも、「ヒットラー、チャーチル、ムッソリーニ？」と聞いた田舎の爺さんの機転の粒度も高いのだ。

24、社畜の構造

社畜（しゃちく）とは会社等に雇われ、一定の身分保障やわずかな賃金と引き換えに自由を放棄して、朝から晩まであてがわれた仕事をこなし続ける人型ロボットあるいはゾンビ、強いて良く言えば無名戦士群のことだ。だがなぜこのような非人間的な制度が堂々とまかり通って改善の兆しすらなく、しかも多くの人が自ら進んでこれになろうとするのか。

思うに根本的な理由は2つある。第一の理由は貨幣経済だ。貨幣は世の中の潤滑油であり自主的自動的に隔々まで作動してくれる、極めて便利な優れものだ。少なくともこれに代わる制度は無いだろう。共産主義がこれを廃止しようとして失敗しているがその理由は、理想はともかく自主的に回転しない仕組みだったからだ。第二の理由は人の欲だ。人は大抵少しでも贅沢をしたいし、欲のない人でも木や植物でない限り最低限の衣食住は必要だ。だが自分ではこれらを生産できないので、人の手を借りて調達する必要がある。そしてこれらの2つの理由を組み合わせると、答えは社畜になる。

生活のために金が必要。その金は他人から獲得するものだ。そしてその他人とは通例平均的な凡人である。だから金を得るためには、並みの凡人が金を出したくなるような分かりやすい価値を創出する必要がある。その分かりやすい価値とはどんな愚か者でも便利だと思うもの、具体的には電気髭剃り機とかインスタントラーメンとか缶

ビールとかティッシュペーパーとかだ。あるいは歯車とか都市ガスとか下水道管とか見えない物の場合もある。間違っても高尚な哲学であったり前衛芸術だったりと言うことはない。

だから社畜たるもの、仮に私人としては尺八で人間国宝クラスだったとしても、会社では滅私奉公する無名人でなければならない。社畜は従順なほど、そして取り換えが効くほど褒められるからだ。金のためなら少々の悪にも目をつぶる。特に経済システムが高度化した現代においてはこの傾向はますます深化していて、部品に徹することがすなわち社畜道なのだ。実際どの会社にも居るだろう、さも偉そうに社畜道を垂れる上司や先輩。

と言うとおそらく反論がある、「無数の無名の社畜のおかげで現にあなたの生活は向上しているでしょう」と。確かにそういう面はある。つまり貨幣制度とその申し子の社畜、このシステムは「ミクロ（個人レベル）はともかくマクロ（社会全体）には善だ」と言う主張である。この主張は一面当たっている。彼らの生産行為のおかげで、我々はコモディティーに不便しないからだ。だが会社で開発製造職など一握りだろう。多くは営業職とか宣伝職とか経理職とかだ。

そして例えば営業職が、顧客や仕入れ筋を競争会社から奪ってきたとしよう。これは社内では大のお手柄だ。上司からお褒めの言葉をもらえるし業績評定もA評価になって給料も上がり、さらにもしかしたら栄達もできるだろう。だが社会システムトータルとしてマクロに見たときに、これは単にゼロサムでの争いであって、貢献度は限りなく零だ。

もちろんこう言うかき回しが業界を活性化させるとか、一步一步だがより適切な状態に物流経路が再構築するきっかけとなるという意見はあるだろう。だがこの程度の貢献だったら、単に小遣いが稼ぎたいだけの個人株投資家だって、本来の目的ではないにしろ結果的には果たしている。つまり貨幣制度と社畜のセットは、仮にマクロには善だとしても効率の悪い愚かが奨励されるシステムなのだ。

社畜の住処は、マクロには効率が悪い上にミクロには仕事の粒度が悪い、つまりお互いがつまらなくなるように職務分割がされている。例えば経理部、他人の金を管理しているだけで威張れるかもしれないがつまらない。他方の管理されている方はいちいちお伺いを立てないといけなくてこれまたフラストレーションがたまる。あるいはSMAP問題で明らかになったタレントと事務所の分担、タレントはちやほやされるかもしれないが自分の髪型一つ決められない。いずれも関係組織の利潤追求のために必

要悪で分割されているのだが、粒度が悪く国民皆歯車だ。

そもそも貨幣制度は、これを回すことによってさらに利潤を上げることを予定したシステムである。もちろん回し方が下手だと損失しついには破産に至る。そういうリスクはあるものの、基本的に回してなんぼだ。だが回せるほどの資金を持つ者は限られている。だから資本主義に資本の寡占化と貧富の差の拡大は論理的帰結なのだ。そして社畜は、一定の身分保障と引き換えに資金を回す権利を放棄した者と位置付けることもできる。要は奴隷や動物園の動物に同等なのだ。社畜を回避する手っ取り早い手段に起業があるが、これは破産のリスクを抱えている。だが奴隷に破産はない。波風なく過ごしたい人に社畜はありがたい制度ですらある。

以上のようなことから、もし世の中に社畜しか居なかったら小手先の目の前の進歩はあったとしても、括目するような社会の大進歩はありえないことになる。一種の近世暗黒社会だ。でも現実には社会進化はあって、これは社畜でない少数の奇人々によってもたらされている。膾炙した最近の例が、パソコン(個人用計算機)の生みの親であり、入力をキーボードのラインエディター方式からマウスの画像方式に進化させ、さらにタッチパネル方式を提案し実用化したスティーブ・ジョブズ氏だ。

彼の場合は革新的なアイデアが次々と湧いて出て、悠長に社畜などやっていられなかった。つまり社畜にならなかったのではなくてなれなかったのだ。だがこういう先駆的な人物の常として、一度ならず古い常識の人々に追放されている。ジョブズ氏の写真を見ると、私は宗教指導者を想起する。似たような例では聖フランシスコが居る。彼も「自然は人に支配されるためにある」が常識のキリスト教において、自然との調和を訴えてフランシスコ会を作ったのだが、やはり会の仲間から追い出されている。

ガリレオの例を見てもわかるように追い出されるほどでないと世の中は変えられない、これは法則だ。日本人の例では孤高の画家だった田中一村、彼が見いだされたのは死後で、見出される前の彼の絵は民家の壁に画びょうで無造作に留められていた。

するとまた反論があるだろう、「ノーベル賞受賞者に追い出された人は居ないが」と。この反論は良いところを突いている。ノーベル賞はそれなりの業績の人にあげるものだが、基本的に従来路線の上でちょっと大きなことに気付いた人にあげるものなのだ。彼らは、ジョブズやガリレオのように世の中を変えてはいない。新しい路線など何も提案していないから、煙たがられずに追放もされなかった。ノーベル賞受賞者は実は天才より社畜に近いのだ。

2015. 02. 23